明治二十九年十二月二十四日發行

女鑑

第百二十三號

東京國光社

女鑑第百二十三號

目録

鳥井與七郎の妻



歳晩の雑感

春花、秋葉、互に、榮枯して、二十九年も、今まさゝ晩れなんとせり。吾人、今日、豈、感慨なからんや。

抑、吾人の日夜講究する所のものは、空理にあらず、虚論にあらず、また、浮文にあらず、華辭にあらず。一に、皆、人生處世の要道を明にし、婦女子が其の天賦の職分を全うするに於いて、毫も支吾することなく、欠損あることなく、有形、無形の事、皆、其の所を得て、道義、倫常の正變、ともに其の宜に適はんことを期し、滿天下の婦女子の爲に、この大標準を立て幼なる者は、之を望みて自起ち、壯なるものは、之を見て自警め、老たる者は之を視聽きて自省みて、敢て其の道に違ひ其の義に悖らざらしめんとするなり。故に其の公私大小を論ぜず、内外雅俗を問はず、苟も人倫に關し、世道に係るものは、反覆して之を議論し、その正

邪當否を天下に明にせんことを、是務め、未、嘗、毫も懈らざるなり。

顧ふに、本誌を讀むものと、之を聞くものとに論なく、吾人か正議讜言は、必、その心胸を快豁ならしめ、其の意志を純正ならしめ、而して、其の言行をして端莊靜一ならしめしものなくばあらず。たとひ、直接の効果あらざるも、冥々の中に於いて、其の心性を啓發したるものあるは、斷して疑はざる所なり。

吾人は、風を淳くし、俗を矯すを以て、天與の職分なりと確信するものなり。故に、世に阿りて以て售られんことを求めず、時に媚びて、以て喜ばれんことを求めず。されば、その言の俗人に便ならざるもあらん、又、その論の不肖者に利ならざるもあらん、然れども要するに、世の婦女子をして、正理公道を知り、國家の臣民たる本分をつくさしめんとするに急にして、敢て其の他を顧みざるなり。

吾人、頃日、野人の言を聞くに、いはく、「今日の婦女子には、往々、その教育の本旨に違ふものあり、かくては、身體は身體、學問は學問、各自、その効用を異にせるものなり。婦女子の教育は、實に善し惡しなるものなり」と、この言をし

て、果して信ならしめば、吾人の刻苦は、悉、水泡畫餅たらざるを得ざるなり。ああ、野人は、何故に、かゝる言を出だしゝか、何故に、かゝる言を出ださしめたるか。其の源する所、果して、何々にあるか。吾人は、諸孃、否、滿天下の婦女子とともに、この問題の講究に從事せんと欲するなり。

諸孃も、亦、この歲晚に方りて、深察熟慮して、一年の往事を追究すべし。一事、一行、果して其の正理に合するや否。一言、一動、果して其の正理に合するや否と。而して、又、追考すべし。某月某日、某の事の得失如何。某月某日某の誨諭如何。と。かくの如く一歲中の言動を檢察し來りて、果して、心に快からざるものなく、中に愧づべきものなく、自疚きものなくは、將、何ぞ、人言を畏るゝに足らんや。滿天下の婦女子にして、果して、皆、かくの如く高潔にして、失行なからしめ、而して、世人、尙、之を議するものあらば、吾人は、之が爲に、畢生の力を振ひて、駿議辯論する事を辭せざるべし。たゞ、未、輙く之を爲さゞるものは、則諸孃とともに大に硏究せんとする所のものあればなり。今や歲抄に際し、

感慨、最切なり。思ふに、諸孃果して、吾人と感を同じうする所ありや否。書して以て之を問ふことしかり。



論説

蔽の一字

坂本三七郎

蔽の一字は人情に於て免かるべからざるものにして、苟くも賢聖の人にあらざれば、此の弊を脱することを能はず。利を好む者にして財に蔽はれ、名譽を望むもの丶名に蔽るは、皆是れ身邊目前の利害、己が耳目を蔽へるなり。蔽の一字は人情の脱せざる所なりと雖ども、日常婦人が行ふ所に於て、最も蔽の切實なるを知る。情に專なるは女子の天性にして、尙ぶべきところ、而して欠點も亦此に在て存す。其蔽の害を去る、人を賢母良妻と云ひ、其蔽に放縱なる人、之を愚婦と稱し、甚しければ奸婦と云ふ。是れ皆情の蔽なり。女子に敎育の必要あるは、此蔽の字を去りて、皎たる中秋の月の如

くならんことを、望むに過ぎざるなり。

少女相會す、彼此衣裳の美を稱し、且之を誇る、彼等は既に五采の美に蔽はる。彼は容色艶にして、脂粉の粧ひ巧なるを爭ふ。彼等は既に美貌に蔽はる。然れども、吾人は、其衣裳を美にし容貌を粧ふは、女子の一美徳にして、其性また然らんことを欲す。何ぞ女子は己を喜ぶもの丶爲に容くるとして、之を斥けんや。衣の紅紫なる固より可なり、脂粉の淡濃吾人固より之を贊す。唯だ衣裳の美をして、更に奢侈ならしめ、態容を粧ふて冶樣ならしむるに至りては、衣の慾に蔽はれ、容の美に蔽はる丶ものにあらずして何ぞや。

垂髫の稚女尙は且假髮を慈母に强請し、花樣の絹釵を抛ちて金線の帶を求む。母が兒の請に從ひて、購ひ與へて、其女の美に蔽はる丶情を戒むるを知らず。男兒が書籍を買ふを止めて、春衣一領の絹衣ならんことの請を許す。普通世上の母情は、寧ろ彼を舍て丶之を望み、一朝の銀線金糸の帶、上下綾羅紗の服、之を裝はしめて、喜び、送て門に到り、四顧して人の視んことを欲するは、女性の情蔽にあらずや。また兒孫を愛する姑息の蔽にあらずや。

女子たるもの丶蔽は、全く情の正非にありて、其發して顯はる丶愛にあり。愛にして

蔽はるゝなくんば、則ち女性の情是に於てか正しと云ふべし。而して女子徳性の教育全く此に在て存せり。教育は他なし、女性をして本性を養はしむるにあるのみ。愛の正邪最も兒を教育するに於て岐るゝ所、且之より大にして重きはなし。若し更に女子か愛の當非を察すれば、世上のこと盡く女子の愛に左右せられざるなし。而して其左右せらるゝは、常に愛の邪にして曲路なる中に葬らるゝもの多し。世人女子の愛を買ふか、女子其天然の愛を枉て之を陷るるか。吾人は其果して何れが信なるを知らずと雖ども、畢竟女子は情を性とし、情發して愛となり、其愛は天下に至大の勢力あるを知らずや。社會は、此愛、及び此情をして全たからしめんことを望む。若し父母を慕ふこと「神無月時雨にぬるゝ紅葉はたゞわび人の涙なりけり」と歌ひ、赤誠至情夕陽映じ來る滿山の楓林よりも紅なり、夫を思ひて怨みざること「風吹けば沖津白浪たつた山夜半にや君が獨り越らん」と云ひ、其貞にして淑徳ある、夫をして慚謝せしむ。其他兄弟を懷ひて「泣くなみだ雨とふらなん渡り川水まさりなばかへりくるがに」と呼び、子を哭して「きたへ行く雁ぞ泣くなるつれてこし數はたらでぞかへるべらなる」と泣きたる、皆な是れ一片の詐を入れず、一滴の涙凝て九泉に到るべし。是れ自然情のまゝなり。鏡奩雲翳なし。之が爲に、醜、美を蔽はず、其明鏡に對し情蔽なきか。婦女

子端麗の裝をなせ。脂粉の粧を凝せ。清衣淡粧、吾人は其女性の情を養ふものとして、心性の美と相照し、其人の品位をして更に高からしめん。此の如くにして後、彤管一枝、女德女敎の道を說き、發して行爲となり、文章となり、今日濁流女界の砥柱たらば、吾人は之を迎ふるに於て吝ならざるなり。敢て情蔽を說きて今世婦女子左右の戒となす。

女子敎育一斑（三十二）

三輪田眞佐子

第六、母たる智識。　昔日漢の王吉、夫婦のことにつきて上疏せしことありけり。その中に、未知爲人父母之道而有子是以敎化不明云々とあり。わが國今日は、女子の敎育稍行るゝとはいへ、母たる智識を養ひて嫁するもの少きが如し。これ國家のため、子孫のため、憂ふべきことにてこそ。

母たるものは、先づ身の强弱と、生るゝ兒の體質と、如何なる關係あるか。若しくば、その德操及び性僻と、子孫の遺傳につき、幾多の因緣ありやなど。所謂體敎を爲すに足る婦人こそ、眞の母とはいふべけれ。

既に兒生るれば、これに與ふる飲食衣服、さては時候の關係より、その步行につきて、

言語につきて、注意すべきこと少からず。これには、近來育兒法とて、大概の心得を載せし書もあれど、幸に讀者は學ぶよすがを得るならん。唯恐らくは、往時の女子は、實驗に富みし母より、かゝる智識を實踐的に學びしを以て、嫁きて人の母たる身分とならんも、多少の缺點あるにも拘はらず、活用せしは事實なりけん。今日は學校に於て、記誦的にこれを學ぶを以て、理論に通ぜんも、實地に兒を育つるは拙きものなりとかや。一擧兩得のまゝならぬこそ是非なけれ。

況して普通の女學校に於ては、育兒の科を敎ふるもの少きが如し。蓋、おのれが前にものしけるが如く、女子とはいへ、あるは文學を專修し、あるは美術を專攻するなど、高等にして、しかも特別の目的を有する女子の學校は兎まれ角まれ、普通の女學校は、女子特有の本分を盡すに足る智徳を養ふこそ、その目的なれど、男子の學校と全く趣を異にし、女子にのみ必要なる學科を先きにすべきなり。佛人(フェネロン)原著、米人(ルプトン)英譯の女子敎育論に婦人の學は男子の學に於けるが如く、各その本分に應じて敎ふべし。男女職分の相違は、男女究學の差異を生ずる所以なり。故に婦人の敎育は、婦人的の事項に限るべし。と、あり。おのれは、元來、彼の國の事物に暗しと雖、この論に由りて推測すれど、彼だに女敎に於て重きを置くところ知るべきなり。

進みて肝要なるものは、家庭敎育のことなり。本來家庭敎育は、學校敎育よりも注意すべきものなるに、世人はこれに冷淡なるあり。何となれば、いづれの女學校にも、家庭敎育なる學科を生徒に授くるなきが如し。然るに、女子敎育の必要を説くものは、多く女子は國民の根本なる少年を家庭に於て敎育すべき大任あるを以て、婦人の賢愚、あるは德不德如何によりて、一國の風俗人情の善惡に影響するものなれど、苟も社會の文明を望むものは、主として女子を敎育せでやはあるべき云々と。されど、學校に於て家庭敎育の智識を授けざるに、出でゝその任を負はしむるは、さながら蒔かざる種の實るを待つと何ぞ撰ばん、信に矛盾の甚しきものにこそ。

そも〳〵家庭敎育は、なほ學校敎育の如く、兒童のため、智、德、及び体の三育を施すものなれど、中に就きて重きを置くべきは德育にこそ。然るに、たま〳〵、世には、家庭に於て兒童に文の讀方を敎へ、あるは小學に行く素習をなすを以て、家庭敎育の能事盡きぬと思ふめる人あり。勿論かゝることも家訓の一端ならん。なれど、元來家訓の主眼は、兒童の素性を純良に導き、學校に行きては秀づる學生となり、社會に立ちては拔んづる國民とならしむるにあり。

かく兒童を敎育するのみにて母の分終りしにはあらず。苟も母たる以上は、大義名分

を心得て、兒童の年たけ斑白の人となる後までも、戒むべきことは戒め、護るべきことは護るべし。時頼は北條氏中最も良き爲政家なり。されど、なほ、母君禪尼より教へられしにはあらざりしか。嚴延年は河南の大守にして賢明の聞ありき。されど、また、母の戒を受けしは誰も知るところならずや。あはれ教化隆なる現今の女子たるもの、かゝる母とならでやは止むべき。

おのれは、女子の教育につきて、かゝる必要ある學を忘れ、卒業の後、婚嫁して臍をかまむも及ぶなき思をするもの多きを觀て歎かはしうなん。凡そ人には定數あり。歳月は生命なり。故に無用の些事に心を勞して、尊き歳月を浪費するものは短命者なりといふも可なり。時將に明治二十九年も終らんとす、讀者果して歳月につき如何に感じ給ふか。おもひね。花は今年咲かざらんも來春あり。月は今年さえざらんも亦明秋あり。獨り人生の定めなきこと、さながらうたかたのごときを。されど、僅の歳月に多くの功を世に殘す人こそ幸福なれ。

史談



鳥井與七郎の妻

鹽井ふく子

岩はさけ、山はくづれん世はありとも、何時如何なる大風大水に逢ふも、つゆくだけぬは節婦の心。元龜のはじめ、越前の朝倉右衛門佐義景が家人鳥井與七郎といふものゝ妻、その名は何と呼びしか、與七郎の朋輩川合安藝の守の娘にて、月ならで正にこれ三五の月、心も姿もうるはしう、かゝやくばかりの生ひさきもこもりし婦人。さるを、はやくも村雲のかくしぬるぞ口惜しき。

はじめ、織田信長公越前を攻められし時、義景うちまけて、一族家人ども、みな利根山といふ所にてうたれぬ。與七郎も此の時にうち死してけり。義景は逃れて山田の庄にかくれ居りたりしかど、その臣景鏡、二心を起して、ひそかに敵に通じ、みづから義景を殺したるぞ憎くき。

かくて、信長公の軍兵どもは、義景のありかを知りて、みな其處の山田の庄へと入り

込み、さのみは捕ふるものもなきものから、家をこぼち、樹木をくだき、其處らいたづらにかけめぐりて、婦人小人目に入るにまかせてうちとらへ、亂暴狼藉ある限りつくす中に、何處よりか、二八ばかりのいとうつくしく清げなる女房をからめ來り、とりこならむ、たゞ其まゝにつなぎて、やがてはたゞひき行くべきを、之は、あさましきわら屋の内にすがごもをしきて、其處にすゑ、武士にや、虎にや、狼にや、何れもあらけなきものども、情けも知らずひきゆくに、道のほども聲たてゝ泣きかなしみし女房は、かゝるさまにいよ〳〵かなしく、あさましく、捕ふとならむ、たゞ捕へ給へ、さやうなるいたづらごとはゆるし給へ、ゆるし給へと、わぶれど、泣けど、拜めど、もとよりあはれも情けも知らぬ虎狼ども、ます〳〵をかしう狂ひよるを、女はなほもなきまどひて、力の限りよせじとすまへど、あら〳〵しきものども、その數もいと多ければ、何かは拒みはてん。今はせんすべなく、きつと思ひかへし。かくある上は、もはや力なし、父と夫は利根山にてうたれ侍りぬ。母と姉とのちり〴〵になれるが、いづかし、わが身のゆくへを如何にと心元なく案じ給ふらむ。硯あらばかし給へ、せめてはその方へ、露の命のかゝるありさま、風のたよりに傳へてん。とゞけもたび玉はゞ、ありがたき御めぐみ、さあらんには、ともかくも、仰せに從ひまつらんと、少し色をさ

へ和げて述べければ、軍兵ども流石に聞えたりけん。やがてのわらく／＼しきに、紙をとりそへて差し出すに、女房はうれしげにうけ頂きて、はろ／＼とこぼるゝ涙を水に、何事かにじませて、袂に引き入れ、さりげなきさまして、つと屋のうしろに出で、幸、ありし井戸のもとに立ちよりて、身をなげてはてにけり。

此の女房はそも誰ならん、之れこそは鳥井與七郎の妻、川合氏の女なりけれ。もと一身と思ひたる夫をひとり先きだてゝくやしくもある甲斐もなき命を、をしむも、つなぐも、まだ吹きわけられて世にとゞまれる母と姉とのありかを尋ねて、慰めも養ひもせんとてかりに、露の玉の緒たちわづろひてあるものを、吹きすさぶ嵐はいよ／＼はげしく、またその人々にも逢はせずして、千代、八千代、まだ行く先きも長き姫松を、此處にまた薪とくだきたる横さまのあらしぞかなしき。妻女は、虎狼の毒手にけがれて、はづかしき玉の緒をつながんよりはと、此處に是非なく清き井を頼みたるに、心の底もくまれていといさぎよし。

あらくれどもは、物音におどろきて、こは如何にとかけよるに、つれこし女の、井の内にとび入りしなるに、あなやゆだんしてにがしたり、死なしたり、残念やなどさわぎまどひ、井の内におりてひき上げけるに、三寸息たえて玉顔はや光りなく、娥眉さ

びしくうれひの雲をとゞむるのみ。男ども身をあらためたるに、はや息の根も絶えたるに、是非なくかのしたゝめたる文は如何なる事にかと、人々見けるに、

世を經てはよしなき雲もれはひなむいざ入りてまし山の端の月

と一首の歌のあはれにしたゝめありしに、心なき武士ども、之を見て、流石にあはれやもよほしけん、みな涙を流して先非を悔いぬはなかりしとぞ。さしも亂れたる世なれど、清き心の月、なほ山の端にとゞまりて、今までもかくは光り殘りぬ。

きの女

薫風仙史

常陸の國水戸の南領木能谷村といふ所に、傳兵衛といへる農夫ありけり。妻をきの女といふ。母は年老いて八十路あまりになれるに、夫婦ともに心をあはせて、いつき養ふにれつるくまもなかりけり。つねに母の心のむかふ方をはかりて、それにたがはざらんやうに心を用ひて、老の心を樂ませて、おのれらも亦これをこよなき樂とせり。この母、田植うるを見るをこのめりければ、五月の早苗うゝるいそがはしさにも、朝はとく起き出でゝ、きのみづからは脊に母を負ひ、傳兵衛は糧むしろなどをたづさへては、田のほとりのほどよきところに、坐をかまへて母をすゑ、傘をもて日をればひ

煙草などをさへそなへて、いさゝかも不自由のなからんやうにはからひて、さて二人は田にれりたちては早苗を植う、母はこれを見てこのうへもなき心の樂とせり。かくすることを常なれど、鄕人のうちにはこれを見て、ひろかわらふものありていふやう、世に母を負ひて見花せりといふことは、聞けども、草ぎりたがへすに、母を負ひて野原にゆくといふことを聞かず。この傳兵衛がすなるわざは、ねうもなきことにて、日に増してたゞ母の心を驕りたかぶらするなりといひ、れとすを、きの女きゝて、ろはさもあるべし、さもいはゞいへ、されどもかけかへもなきたゞ一人の老母、たゞその心のまゝにまかせて、さきながゝらんとも知らぬ老年を樂しくすぐさせはべらんと思ふ心やみがたくてなり。かく思へどもなほ思のとゞかずして、老の心にまかせぬこともやわらんと心をいたむるあり、といふをきゝつたへて、果ては大に愧ぢて、口をつくめたり、心あるものは更なり、しるとしらぬとその德を慕はぬはなかりきといふ。そも〳〵いへどこれ世の常なり、子として親をいとほしみするは世の常のことなり、しかれども、せまからぬ世には年老にたる親を、朝夕にかしづきつかふるがわづらはしげにすめるものゝなきにしもあらざるべし。いぬねこの類ならでしらず、人とうまれては、人たるべき道をふまでやはあるべき。



家政

たちぬひ

西山たい子

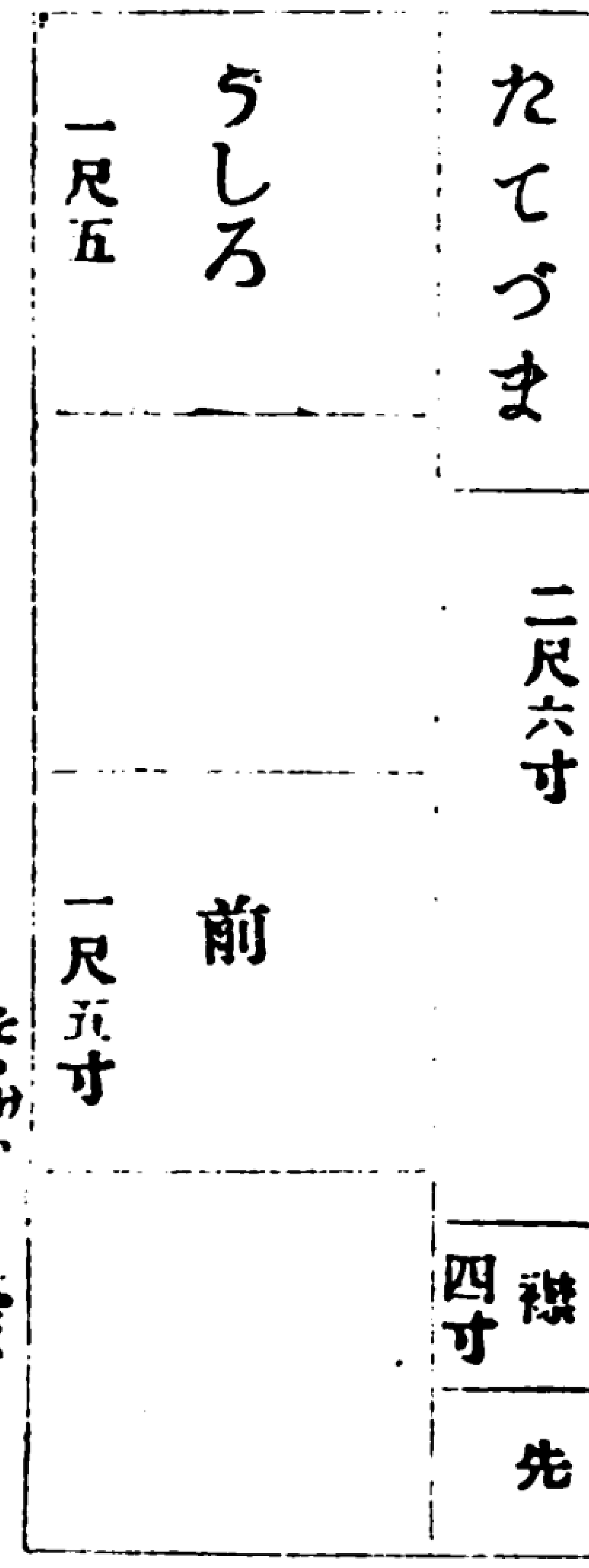
（五十七）　女下着脇秡の縫ひ方

まづ奥袖の下へ、ふりの切れをはぎつけ、袖口の方の半袖を縦にまつすぐにけぎつけて、袖をぬふべし胴もまた上下とも脊、脇、ぬひれきて、丈けをはかりてはぎ合せ、衽にも衽先きをはぎ合せて、上着の如くにして、ぬふべし。寸尺は上着によりて定むべし。



（五十八）一尺三寸巾裾圍の裁ち方

その圖

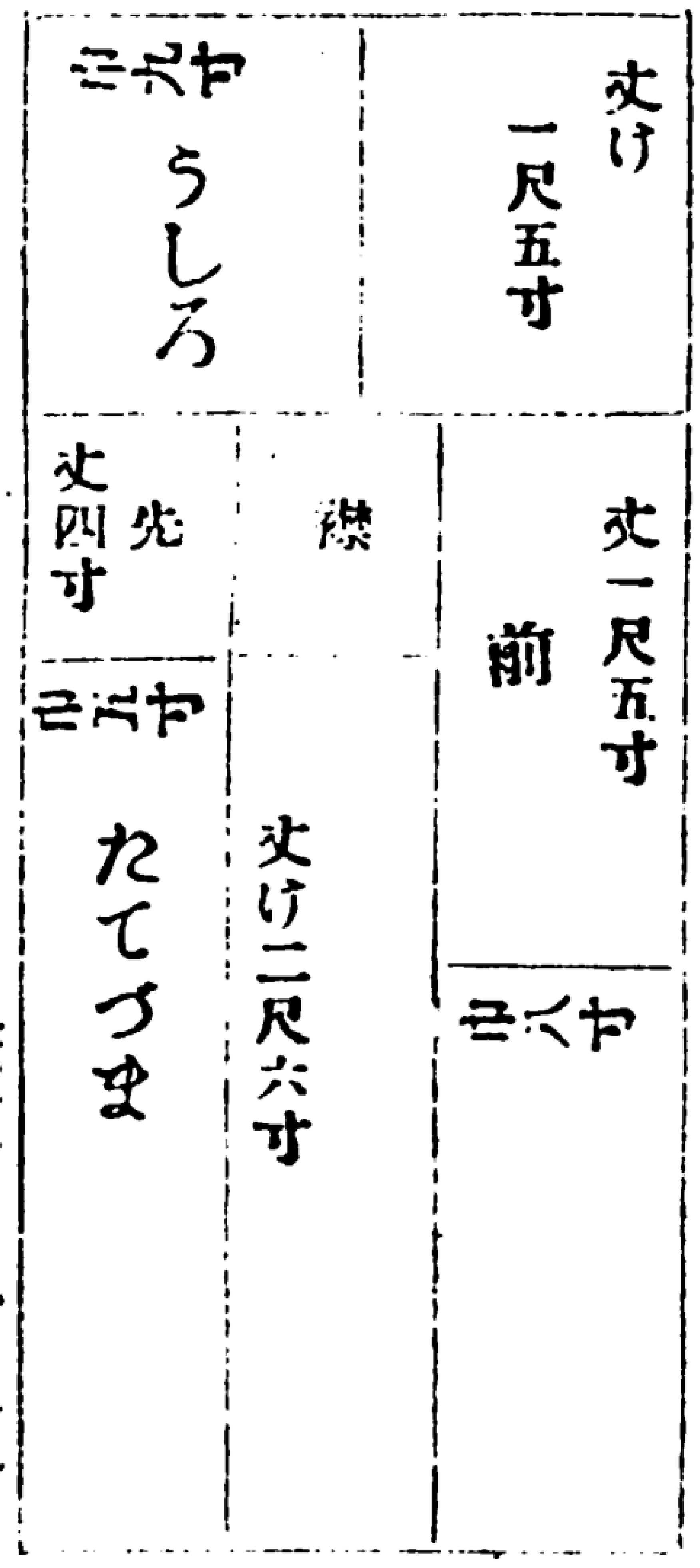


總計六尺

圖の如く、まづ片端より、四寸五分巾かきとりて、たてづまと、襟先とになし、巾ひろき方を四つにたちて後と前とになすべし、圖を見合すべし。

（五十九）大巾物裾圍の裁ち方

その圖



總計四尺五寸

圖の如くまづ一尺五寸を切りとり、それを縦に眞二つに切りて後ろとなし、殘りより前巾だけをかきとりて横に二つに切りて前となし、その殘りの先きより襟先きをかきとり、兩方ながら二つにさきて、たてづまとすべし圖を見合すべし。

造花

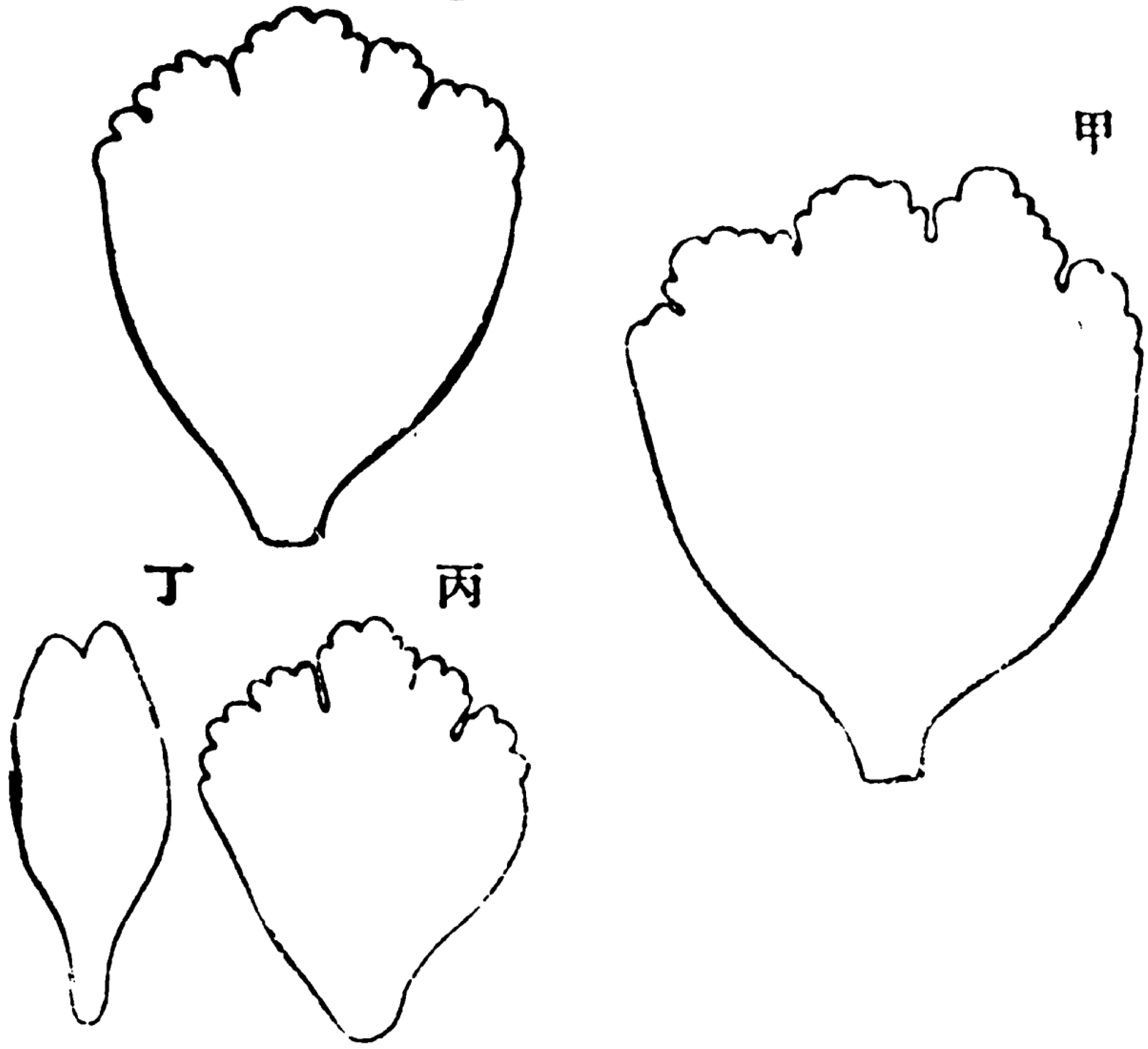
共立女子職業學校教授　伏見藤三郎

寒牡丹

滿開の造り方。花瓣は、寒冷紗又は絖を用ひ、寒冷紗は其まゝ、絖にはうすのりを引きて、第四十五圖に示せる如き、大小四種の形をとり、後之を色染めすべし、色染方は、花瓣の半ばごろより先を、「ロー

ザミン」にて赤くぼかしにそめ、

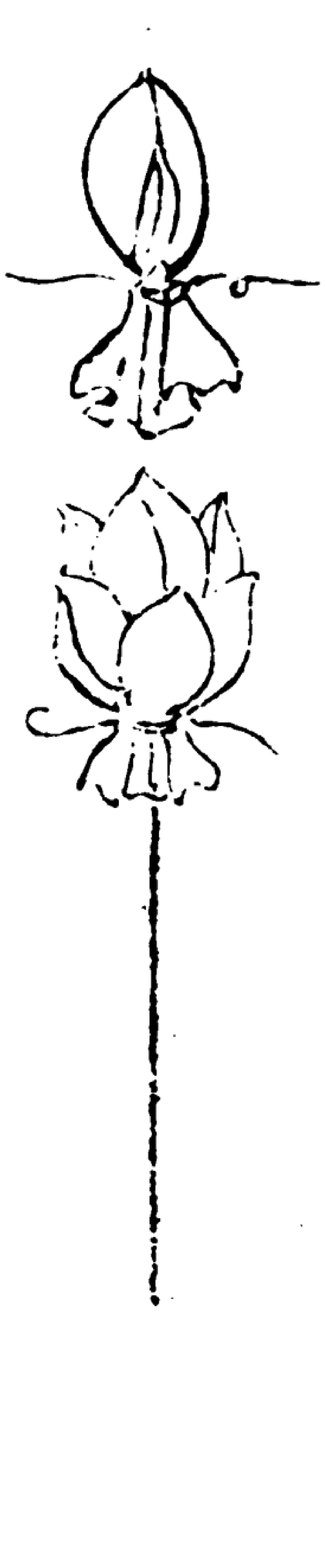
第四十五圖



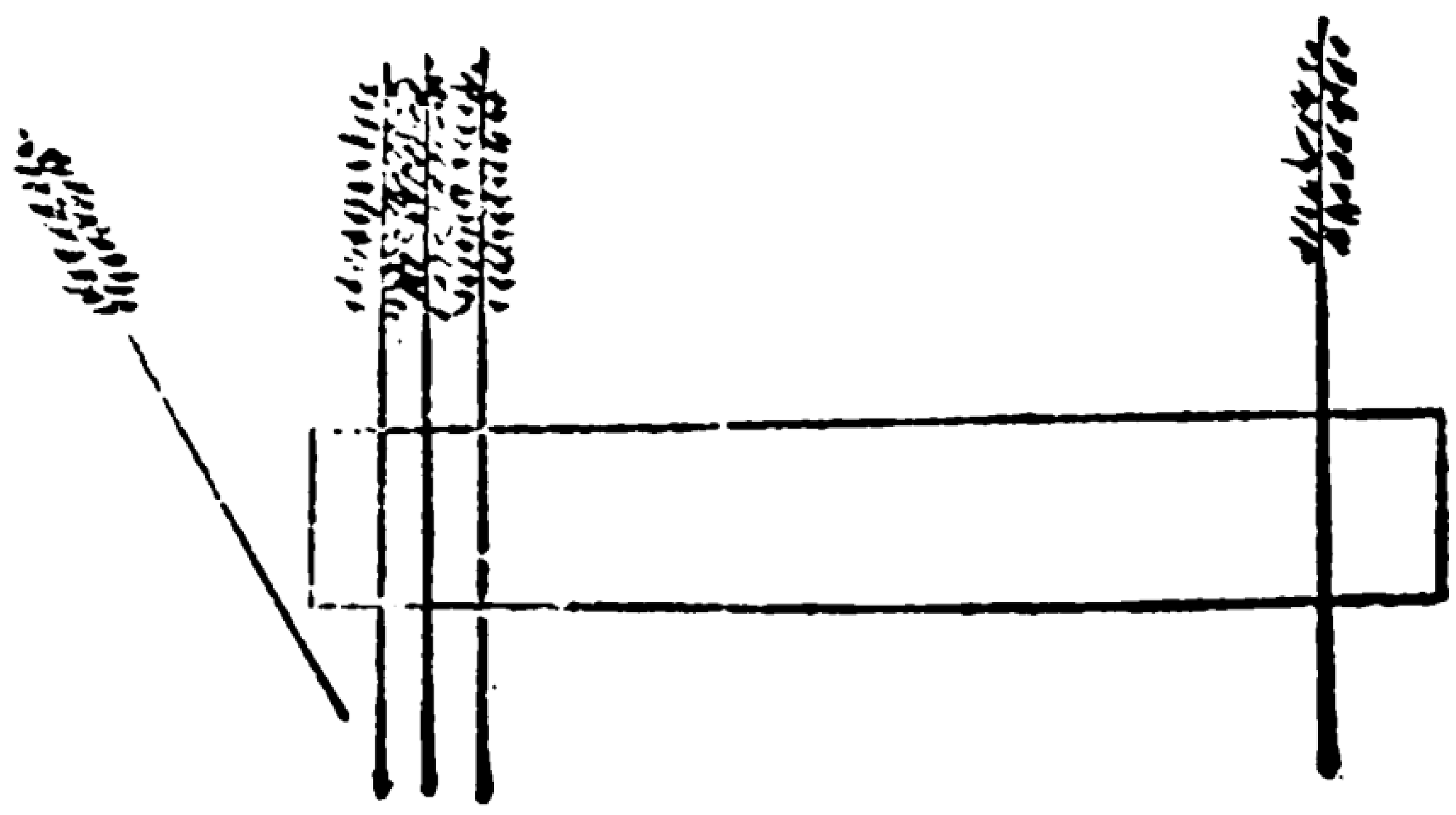
元は「オウラミ」にて薄黄色にぼかすべし。之を乾して後、其の花瓣を縦に二つに折り、之を布に包みて板の上に載せ、折りたる方を向ふにして、左の掌にて其上をれさへ、右の手にて包みたる布の一端を持ちて、櫻の葉を造りし時の如く之を絞るべし。斯くして后、菊鏝にて、花瓣の先少しく切り込みたる處の一端を表より縮らし、他の一端は裏より之を縮らし、悉く此の如くして后、瓣の中央を薔薇鏝にて少しく凹ますべし。

蘂は第四十六圖に示したる甲の如く、薇薔の蕾の異と仝じもの數個をつくり、之を「オウラミ」と

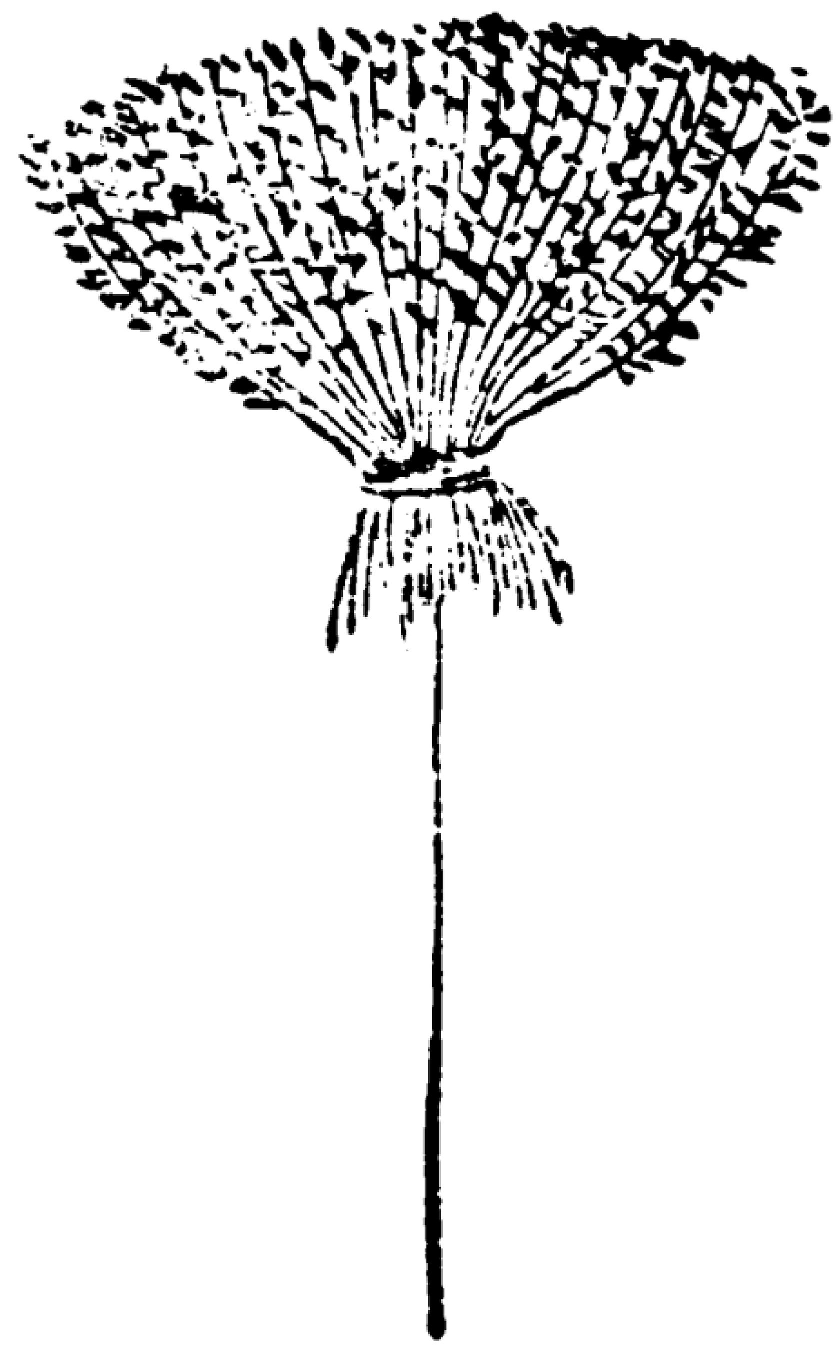
第四十六圖



丙



丁

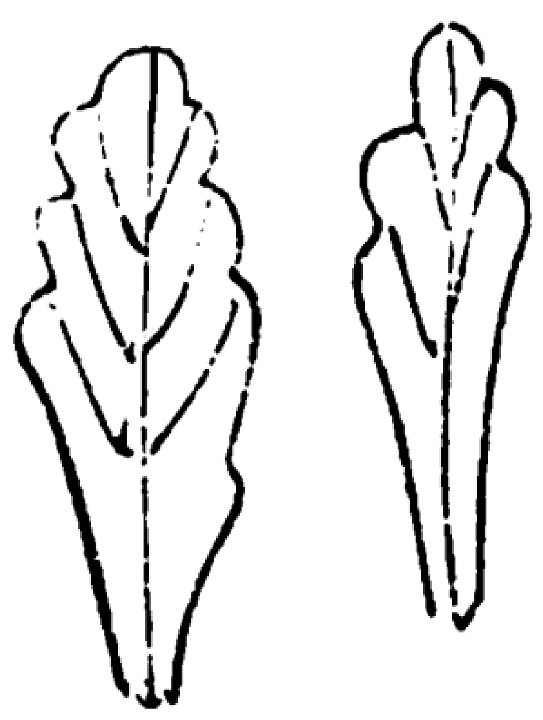


「アヲタケ」とにて薄くぼかしにそめ、集めて乙の如くなしおき、別に、二十番のカタン糸をとり、極く薄く解きたる糊の中に「オウラミ」小許を入たる液にて染め之を枠にくり、又は木の枝に張りて乾かし、之を長さ一寸づゝに斷ち、其の先四寸までの處に糊を付けて、椿の花紛に用ひしものと仝じく、酒中花(山吹の眞)を極く細かくおろして黄色に染めたるものをつけ、この糸を、美濃紙を巾四分、長さ適宜に斷ちたるものに、丙の如く並べて付け、前に造りしものゝ回りに卷き付けて丁のごとくすべし。この蘂に、先づ花辨の丁三枚をつけ、夫より漸々、丙八枚乙九枚、甲十枚を適しき配りに付け、あとより蕚をつくべし。

蕚は、寒冷紗を薔薇の葉と仝し色に染めて、后、第四十七圖の如き形に、甲の1三枚、2二枚、乙五枚をつくり、甲は筋鏝にて葉のごとき筋をつけ、乙は

第四十七圖

甲　2　1



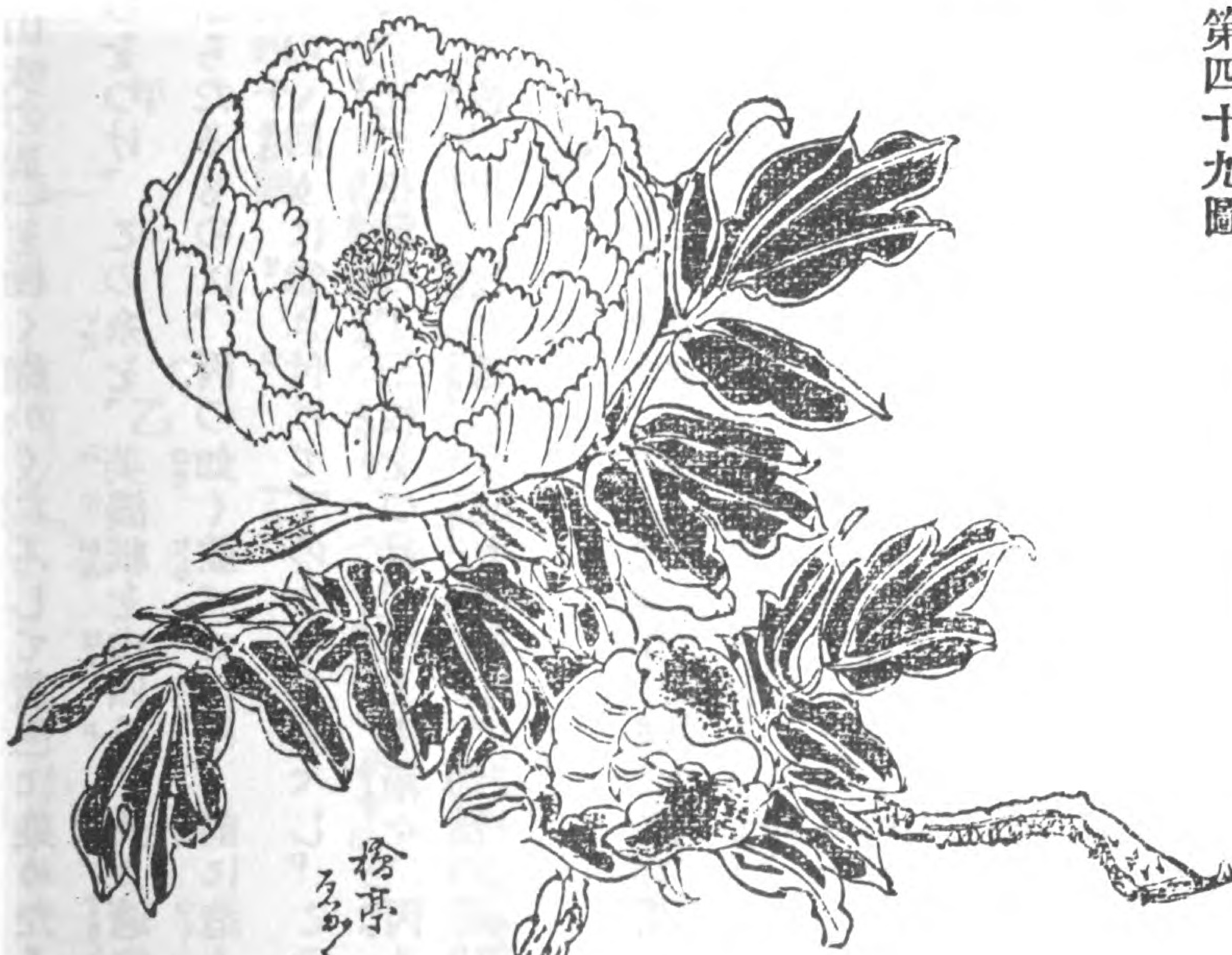
乙

薔薇鏝にて少しく圓みをつけ、之を花に付くるには、先づ甲の五枚を適宜につけ、後乙五枚をつくべし。

葉の造り方。葉の造りかたは、すべて薔薇の葉と全し事なれど重ねて載せず。只形は、第四十八圖の如くつくるなり。



第四十八圖



第四十九圖

半開の造り方は、第四十五圖に示せる花瓣の、乙、丙二種のみにて、中央の凹みを少しく深く造るなり蘂、蕚等と皆滿開も仝じ事にして、少しく小く造ればゞ可なり。

蕾の造り方は、第四十六圖の甲の大なるものをつくり、其先を赤くぼかしに染め、之に直ちに蕚をつくべし。

莖には侍紙を用ひて、滿開、半開、蕾等を適しき配置に造りまとめ。葉の付根の邊りは、「マセンダ」にて少しくわかくぼかすべし。第四十九圖參照。

だいどころ

鷄兒「カレー」

先づ鷄兒の能き肉のみを骰の目にきり、球葱三個日本葱を代用するも宜し、林檎一個を細に刻み「フライ」鍋に大匙一杯の「バタ」を溶き、其中に肉と共に投て能く煎付け、更らに四五個の栗をおろして之れに加へ「シチー」鍋に移し、「スープ」二三合を投し、(牛乳、又肉汁にても宜し)四五十分間文火にて煮たる後、大匙一杯の「カレー」粉、米利堅粉、食鹽少量牛酪七匁を加へ、能くかきませ、尚三十分程煮て出すべし、其盛方は、通例は深き皿に飯を盛りて、其脇に「カレー」を注ぎ、大匙を添て出すも、又丁寧にして、客に供せんには、飯のみを、皿に盛、匙を添へ、「カレー」は別は蓋ある器に投れ、之れにも匙を添て出す方宜し。

鷄卵「カレー」

鷄卵四個を能く煠で、冷し置き、同時に七匁の牛酪小匙一杯の「カレー」を投れ、活火にかけて四五分間

かきまはし、二個の玉葱、一個の林檎を細く刻みて其中に投し、軟かになるまで煎付け、「スープ」を少しつゝ注ぎ、混和物のどろ〳〵に、なるまで文火にて煮たる後、大匙一杯の米利堅粉、能程の食鹽を加へて、能くかきまはしながら、五六分間煮たる時、前の煠で鷄卵を薄くきりて此中に投れ、尚三四分間、火にかけ置き、注意して鷄卵を皿に盛り、其上に「カレー」を注ぎ、冷ゑざるうちに飯と共に出すべし。

野菜「カレー」

カレー料理に適用すべき野菜は、菠薐草、甘藍、蕃薯、胡瓜、青豌豆の類とす、何れにても、時のものをとりて、之れを刻みて、能程の牛酪にて煎付け、前に示したる割合に「カレー」粉、玉葱等を加へ、總て野菜の軟かになるまで文火にて、煮たる後、飯と共に出すべし。



學園

日本文典（二十四）

鹽井正男

なは或は役動助動詞の中に、「せさす」、「せしむ」といふ詞を數へて、これらは名詞或は副詞などの下に來りて、役動の意をあらはすを得、例へば「學問せしむ」、「皆せさす」などいふ如しといふ人あれど、

おのれは其の說を取らず。斯くいふ時の「せしむ」、「せさす」の「せ」といふ詞は左行變格の動詞なる「す」(せ、し、す、する、すれと活用す)の將然の格にして、畢竟、此の「せしむ」、「せさす」の如き詞は、左行變格「す」の將然の格なる「せ」の下に、「しむ」、「さす」を添へたるものにて、殊更に別に取り立てゝいふべき役動助動詞にはあらざるなり。されど、おのれは、殊更にいはざるなり。

八、受動助動詞

これは、他より受くる動作をあらはす詞にて、やがて、他よりさやうにせらるゝ意をあらはす詞なり、例へば、「人に思はる」、「父母に育てらる」などいふ時の「る」、「らる」の如し。斯く「思はる」「育てらる」といへど、わが自ら思ふにも、わが自ら育てるにもあらず。「人より思はれ」「父母の手より育てらる」といふことにて、人より父母よりさ樣にせらるゝ意なり。斯の如き意をあらはすか、此の受動助動詞なり。

る。

この受動助動詞は、その活用するさまは、先に能動助動詞の所にいへる「る」と仝じく、

將然	終止	連用	連体	已然
れ	る	れ	る	るれ

といふやうに活きて、四段活用の動詞と奈行良行二變格活用の動詞と將然の格の下に來りて、この意をあらはすを得るなり。例へば枕の草紙に大進生昌の事を云へる所に、

又なでうことといひて笑はれむとならむとおはせらるゝもいとをかし。

また、おなじ書に、犬翁丸のことをかける所に、

さて後、かしこまりかうじゆるされて、もと

のやうになりにき。
人々にも云はれて泣きなどす。
神皇正統記の中に
やがて、かたらはるゝ族多くなりしにより
て、この制符は、下されき。
その他にもよく
人に打たる。　犬に噛まる。
馬に踏まる。　車に引かる。
など常にいふにて知るべし。

らる。　これも、活用する有樣は、さきに能動助動詞の所にいへる　らると全じく、

將然	終止	連用	連体	已然
られ	らる	られ	らるる	らるれ

と活用して、これは、前の「る」と異る事は、たゞ其が續くを得る動詞の類を異にせるのみ。これは、上二段、下二段、上一段、下一段活用の動詞と加行、左行變格活用の動詞とにつゞくを得るのみにて、さて其の動詞につゞくには、動詞の將然の格の下につゞくるなり。　伊勢物語に
つとめてその家のめのこどもいでゝ、浮海松の浪によせられたるを拾ひて、家の内に持て來ぬ。
または、おなし書に
雪こぼすがごと降りて、終日に止まず。皆人醉ひて、雪に降り籠められたりといふを題にて、歌よみけり。
または、神皇正統記に
この二つの舟、おなじ風にて、東西に吹き分けらる
其の他にも、例へは、

兄なれど弟に越えらる。
矢に射られて死にけり。
馬に蹴られぬ。
友に强ひられて、力なく行きぬ。
われよりと思ふまに、彼れより來られたり。
あつく保護せらる。
きびしく教訓せらる。

などいふにて知るべし。

九　被役動助動詞

これは、前に云へる役動助動詞と全く反對せる意の詞にて、他に左樣に爲さしめられて左樣に爲すといふ意をあらはす詞なり。例へば「幼きより書を讀ましむ」といふ時は、他に讀まする事にて、他をしてさやうにせしむることなれど、「讀ましむ」は役動にて「しむ」は役動助動詞なり。されど、此の被役動助動詞の方は、さにあらずして、例へば、

幼きより書を讀ましめらる

といふ如き時の「しめらる」といふ如き詞にて、「讀ましめらる」といふ時は、他に命令する人ありて、其の人より命せられて讀みたることにて、他よりさやうにせしめられて、さやうに爲したるなり。されど「讀ましめらる」は被役動にて「しめらる」は被役動助動詞なり。此の區別よく〳〵わきまふべし。

また、被役動助動詞の意は、やゝ受動助動詞の意に似たるやうなる所あれど、受動助動詞の方は、單に他よりせらるる動作なる意をあらはすのみなれど、此の被役動助動詞の方は、他よりしかせしめられて、而してしか爲す動作なる意をあらはすなり。

此の被役動助動詞は「しめらる」、「せらる」、「させらる」などいふ詞ありて、皆二個の助動詞の連合し

たるものなり。なほ詳しくは次號に。

新古今和歌集講義（三）

鹽井正男

百首歌奉りし時春のうた　式子内親王

山ふかみ春とも知らぬ松の戸に
　たえ〳〵かゝる雪の玉水。

○式子内親王、後白河天皇の御女なり○山ふかみ、「山深さに」といふ意なり、形狀言の詰根に「み」を添ふる時は、皆、斯く「さに」といふ意に成ることにて「夜を寒み」「風をいたみ」など「夜の寒さに」「風のいたさに」といふ意になるなり、○春とも知らぬ「春が來たりしとも知らぬ」の意なり、○松の戸、松の枝を切りわつめて、結びしぞりて門の戸にしたるなり「杉の戸」「槇の戸」「柴の戸」などいふもれなじやうにしたるにて、その材の異るのみ、また板戸なるもあるべし。「松」は四時常に緑の色をかへぬものなれど「春も知らぬ松」といひかけたるにて、かゝるさはが、此の集の歌の詞の巧みある所なり、○たえ〳〵、なほ「とぎ〳〵」といはむ如き意なり、○かゝる「落ちかゝる」といふ意なり、○雪の玉水「玉水」とは「雨だれ」の事にて、雪の玉水は雪の解けて落つる雨だれの事なり。

○一首の意は、山の深さに春が來たとも知らないが、つもりし雪が解けかゝりて、雨だれと成りて、時々松の戸に落ちかゝるよ、さては春あらむといふ意にて、のどかなる深山住居のけしきは見え、かつは、姿もやさしく、調もめでたきさまなり。

五十首歌奉りし時　宮内卿

かきくらし猶ふるさとの雪の中に
　あとこそ見えね春は來にけり

○宮内卿、右京大夫師光の女にて、後鳥羽天皇の官女たりし人なり、巨勢宗義の外孫にて巨勢流の畫も上手にかきたるが、和歌こそ殊に工みにて世にもてはやされたるが、餘りに歌詠に心をこらしたるが爲めに心をいためて、つひにはかなくなりたるはいとをしかりき、○かきくらし「空かきくらして」といふ事にて「空くらく」といふやうなる意にて、雪のやまず降る空のけしきをいへるなり○なほふる里「なほ」は「やはり」といふ意にて「一層」といふ意にはあらず、ふる里の「ふる」は一の歌なる「ふりにし」と仝樣に「降る」と「故里」の「ふる」とをいひかけ工めるなり、されど、「空はかきくらしてやはり降り居る故里の雪の中に」といふ意なり、○あとこそ見えね、あとは人跡にて、昔はその里も往來ふ人しげかりし故に雪の中にても、人跡はありたれど、今はさびしき里となりはて、雪ふれど人跡見えぬといへる意なり○一首の意は、空は暗く相變らずやはり、故郷に雪は降り居る、かく深く降る雪の中にても、昔は人のあとも見えたるものなれど、雪はやはり昔のやうに降りくらせど、今は里はさびしく荒れはてゝ、雪の中には人あとは見えない、併し春は足なくても來たワイ、足のある人は跡も無きに寂漠たる故里に春は來たワイとうたへるなり、詞のつかひざま、極めて工みなるを、よく〱心して見られよ。



漫録

國字孝經（二）

あ、　ま、

さて、それにさしつぎては、やんごとなう世に時めき花やぎ給ふかた〴〵の御うへなり、かりにも、おごりの御心だにおはせざらんには、高き御位におやふげなく、又物のつひえをも、よきほど〳〵にはぶかせ給ひなむ、あまたの民のくるしみなくて、御身の榮華とこしなへにおはしますべし。

其のすぎ〳〵なるも、猶おほやけのまつりごとにかゝりぬべきに、おのれよりかみなるをたすけ、しもなるをあはれみ、はやうたておき給へらし、うるはしう正しき例を守りて、みだりに改めかふべからず、おほやけに德つけ奉らんとてあるだにおきて作り出でなどする、いと〳〵わろき事なり、さかしらなることし出ださんには、下なる人のうらみおふべきやうもあらじや。

すべてむげに、下﨟なるものも、すでに出でつかへたらんには、父のかしこさと、母のいとほしさとをひとつにかね合せて、まめ〳〵しうつかへ奉るべし、はた人と交らはんにも、其のかしこしいとほしと思ふ心をもて、あにのやうにむつびしたしみて、ゆめあらがふ心なからんかし、さてなん、官祿も末なが

うこそはたもちぬべけれ。
又いふかひなうおりたつ、田子のいやしき身にだに、四の時の寒さぬるさをはかりて、種をおろし年あるをいのりつゝ、たくみやあきうどにいたるまでも、おのがじゝうけつたへたるなりはひの道、あしたもゆふべもをこたる事なう、何も〳〵まめやかにつとめいとなみて、さてこそは、心やすう、父母をもやしなひつべかめれ、すべて、高きとみじかきのけぢめはあれど、孝養のこゝろざしは、さら〳〵にかはりしもせじ。
されど、誰の人かは、孝の道をぞたふとしとはせざらん、もし、此のかしこき道なしはてざらん には、天のまなこあきらかに、冥罰いちじるくて、よからぬ事のみ出來つゝ、はて〳〵は、たづきなうはふれさまよひなんはや。

何かじ、孝とは、親につかふるがぎりとこそ思ひ給へしを、こさ〳〵の行ひも、此の孝の道より出まうでくる事、げに〳〵いふかぎりもあらぬ大いなるたふとき道にてこそは侍りぬれ、と、いと〳〵よろこびたるけしきなれど、いでやいで、いふもおろかなりや、此の道よ、あめつちのあひだになきものにて、誰も〳〵常に〳〵心にかけて、ゆめ忘るまじきわざになん、よく守りぬる人は、かりそめなる友だちのまじはりにも、いつはりはかることなう、たちゐふるまひもいつくしげにて、そぞめはづかしげになんある、されど、うるはしくむつまじき中に、おのづがらみだれたるすぢのたちまじるべきやうもあらず、さて今一くさ心得べきは、よろづの人のおもむけのたがひめあるを知り得る事になん、なべての人の心〳〵なるが、よろづの事業にすき好める所と、

いみじういとはしく思へるありて、親子のことにしたしきなからひにだに、心のほど〳〵は、各かはりぬかし、ましてや、主君のめでよろこび給ふに、臣下のよしと思はぬあり、又人々のこれはしもと思へるをも、いみきらひ給へるもありて、うへにたやすうおしはかるべうもあらず、いはんや、やごとなき御身にて、あやしの賤が心のほど、しろしめしわけん事は、かたしともかたきわざにこそあんなれ、さるを、そのこゝろ〳〵のさべちあるをもおぼしいたらせ給はず、又おぼし召知らせ給ひても、あながちは、御心のまゝにおしなほし給ひてんとおもほしなんに、一たびむかりこそ、おほせことのかしこさに、ともかくももどき申さゞらめ、のち〳〵は、うはべにのみつれなくもてなして、したには打わびつゝ、うらみ思ひ奉りぬる事のつもりには、世間のみだれも出來ぬべし、かゝれど、かみなる人は、よく〳〵あまたの人人の、心〴〵をくみ知り給ひて、人々のいさめもどかせ給はず、とにもかくにも、この孝の道をもとゝして、おきふしに御身の行ひに心せさせ給はゞ、をしへ給はでも、下なるもの、あふぎたふとみ、なべてよき方を打まねび奉り、よからぬ方をはぢ思ひて、ひか〴〵しきふるまひはえせざらんかし。

（未完）

またぬ青葉（つゞき）

故人　香川景樹

七日、去年の夏より、二條大城にこもり居れる、小林長利、田邊誨輔、來らん十四日に都を立ちて、江戸へまかり歸らん暇申しにぞ打連れ來る、折にあへむや、つねの心地もせず。

このうちをはなるゝ鳥の一聲は
　　　嬉しからめどかなしとぞきく
兩漢刊誤補遺といふ書を、誨輔れのれ飜刻せしなりとてさしれけるを、取敢へず打ひらくに、そのところにも、哀傷の文字あるに、ふと目とゞまりて、
世の中にかくてやむをのれのづから
　　　うたゝる方もなき身なりけり
佛光寺の御うらの君、をとつとしの四月にかくれさせ給ひし、その御弔の御題奉るべう仰下されけれど、杜鵑に寄する懐舊といふを出しまゐらせつ、さてれのれもよみける。
杜鵑古き軒端を過ぎがてに
　　　昔しのぶのねをのみぞ啼く
こはうらの御殿のれ渡れるをまうのぼるゆきかひに、見入奉りて痛めるこゝろなり、此君は、（和泉守藤堂高疑御女）臣武士の御家に人とならせたまひて、御心立もむげに女々しうなど、いふ甲斐なくはものゝ給はぬものから、いつくしみの露、はたかゝらぬ隈なく、仰ぎまゐらせぬ人なき中にも、れしなべならずれば、し下されしは更なり、娘孝子をさへ、めでかなしませ給ひ、わきて御志深う御袖の下にかいくゝませて、かゝらんよめがねをこそねまはしうなどさへ、宣ひ下されし御戯言も、身に餘りてかたじけなみ奉るは、例のやみなるまどひになん、さてまどひかへりて、なき人に語り聞せたるに、涙をさへ落せしを、今も思ひいでゝ。
御佛の導きたまふ道にしも
　　　踏迷ふべき一すぢのやみ
こゝろのこすなどぞ言遣らまほしき、今日御殿より、籠らひ居る御弔の御賜物あり、かしこしともかし

こし、石見守まさながより仰言傳ふ、伊勢守やすたみが許よりも、いと秘めたる文あり、そのことに曰く、程なく御おもひはて侍らんには、ふたゝび東の旅に赴き給ふべき、御心しらひ在すなど、ほのぐうけたまはるはまことか、いかゞ覺束なし、若しさらむ、さる方の御願更に聽許させ給はじ、近わたりの御暇も、此頃にては御許あるまじくや、さらんには御いそぎ徒になりなんもかたはらいたし、こはやすたみうちぐ御景色とり侍りて、申聞に侍るなり、人わろきかたになれはしうらみそ、厚き御意あらせてなんなど、猶ものふかうかきつめたり、こはさしもしのびて、心の外には知る人稀なるを、誰か聞に漏しつらん、ねたくもかたしけなくもおもひまどひて、そなたの空さへうちまもられて、

あづまはや妻戀坂の神も知れ
　したひかねても慕ふこゝろを

今日しもあづま人に、夏の末かけて、尾張國よりそなたざまになど、いひかはせしも、

あだならん契を知らでたゞ秋の
　露とは何に結びおきけん

八日、さきつ日右大將の君三條公修卿より、さる方の御贈物下されしが、今日しまた御つぼねざまの御弔たまはりぬ、かつなき身の上をさへ、さぶらふ人々よりも、ことにこねて、なげき添へ給ふめるめ　かたじけなしや、又紀の海なるかだめのかぎりもなく、いと厚きを贈り給へり。

世の中を海のもにのみこもれども
　めはなづかしと思ふ頃かな

とはながめたれど、なめしけれど奉らず。

九日、ふけて寢にけるに、庭なる桂の木に、杜鵑二

聲までなき驚かす。

杜鵑寢覺のつまとなりぬれど

きくはつ聲の嬉し氣もなし

と吟ずるはしに、杜鵑げにもこの世の聲でなしと、ねはれたる聲の厨の方に聞ゑたるや、誰にかわらん。

十日、道にして竹內わりみね逢へり。「ともなひ詣づ、四七日なりけれど、ともに岡崎へゆく、わりみね

涼しくも見ゑし若葉は今年より

なき人去のぶかげとなりにき

富小路の君（左兵衛佐貞隨朝臣）とふらひ來て、書置かせし御ふみわり、奥に加へたまへる御歌、

目の前に見るがかなしさ散る花の

上によろへしうつせみの世を

又武者小路の君より、竹と名にれへる酒を賜り給うて、

數ならぬいさゝむら竹うきふじの

世を慰むるつまとだになれ

とよみ下されし御かへし

慰めて君よりくれの竹なれど

まづ涙には染めじとぞ思ふ

今宵例の集ひて、たもひを述る中に駿河守去げのぶ

夏の夜の夢よりげにもはかなきは

君が見果てし世にこそわりけれ

直好

夏くれど庭にれりたち涼みける

人は足らずもなりにけるかな

かくよみけるわひだに、水鷄の音づれけれど、わりみね

眞木の戸をたゝく水鷄のきみにして

立歸りても嬉しからまし（未完）

井蛙小錄　井上頼文

戸越記　橘千蔭

今のれは江戸の大城は、かけまくもかしこけれど、いにしへのれしてるなには高津のれは宮所なして、ひんがしには千舟よる竹芝のうみをみ池とたゝへ、西は雲のゐるちゝぶの山をいらかとなして、そがあはひはたかきいやしき家竝しきて、にぎひににぎひてなん有りける、されど、やむことなきわたりの島このむ君たち、しづけさに心をよせたまふ人々は、其のさかひをさかりて、廣らになり所しめたまへるしもさはなりけり、これの戸越のみさうは、江戸のみなみ荏原の郡品川のうちにて、肥のみちのしりゑらせたまへる細川君、遠つ御祖よりよゝしめたまへる所にて、有が中に名だゝるみそのとなんきゝわたりつるを、ことし濱田君ゆくりなく得させたまひて、長月のすゑつがた、はじめてまかでさせたまふによりて、千蔭も仰せ、ごとのまゝにまゐりぬ、先御門入りてよりはるかにれくまりてみたちあり、れまし所のすのこよりみわたしたるさまは、たゞ誠の野山にひとしくなん有りける、やがてれりたちて、ゑぞふを過ぎてこゝかしこたもとほりて見るにひと日ふた日にみつくすべくもなし、雪をしのぐぞかりの松あまた立てるは、世はなれたるみ山に入りたらんがごとし、山のうへにうま埸のれとゝのあと、石ずゑのみ殘れり、そのわたり楓あまたなみ立るが、稍よりいさゝかそめはじめたり、なほこの楓のそめつくしたらんときに、見まほしくぞれぼゆたる、さ

て神無月のはじめ、そめつくしたりときこしめして又なんわたらせたまふまゝに、千蔭もまうでんやなどおはせでとのいと〳〵うれしくて、朝とく立ち出で、かのみたちへまゐりぬ、なほづむらにみそのゝさまを見るに、百年あまり五十年ばかりのむかし作りなしたまへるまゝなれど、いと神さびたり、そのかみ近つあふみの湖のさまなどまねび作られたりときこえていとふりにたれど、そのおもかけのみ殘れるが中々にあはれになん見えける、すべて大きやかなる岩ほにこけむしたるさまいはんかたなし、み池にはむかし多摩河の水をひきて流れとされたりとて水のおとまさるべきいはほあまたたてなべ、其流にて曲水の宴などゑたまひし所は、其時のさまいま見るばかりなり、いまはかの玉河のながれはかよはねども、おのづからなるみ山よりつたひくるまし水のみ池にたゞへたれど、いみじうきよらにてみてりぬなはなどの生ひしげれるは夏このましきところのさまなり、つゞら折なるさかをのぼれど、かのうまはにて名におふ、高雄、龍田のかへでの木を根こじてうゑたまへるが、いと木高く生のぼりて、左右より枝さしかはして、にしきにつゝまれたらんごとくになんみゆる、この楓はすべて木立のさまよりして、其いろのうるはしさ、よのつねとはいとことになん有りける、名にたかき千さとの遠のもみ葉のいろめでつゝも、君が惠のふかさをぞしるおまし所のすのこのまへに、千引のいしのおのづから、はちすの花のごとくひらけて、くぼらかなるに水たゝへたり。こは肥のくにのあそのみ嶽にむかへる、二重のたむけといへる所のいはほにてたまれる水を、牧の牛とも飲ゐたるを、めづらしみおぼして、むかし熊本の

城へ引かせたまひ、それよりはるけき海原をつませ來らしめて、こゝにすゑられて、牛水と名づけたまへりとぞ、いと〳〵めづらかなり。あその山うしはく神も、みろのふをときはかきはにまもりますらん。み池の中島はよもぎか島をまねび、あるはちくぶじまをうつされたるには遠きさかひよりめづらかなるいはほをひかせられたるか、いとふりにたり。櫻、やまぶき、かきつばた、こと〳〵く名だゝる所よりうつしうゑたまへるなど、書きつくすべくもなし。こは、なは春待てまうのぼりてこそとれもはるゝには、いとゞ老をかさねんなげきはわすれて、たゞこん春をしも待ちわたることになん。やゝ夕日のいりなんとするに立かへらせたまへど、れのれもはたみろのを出づるとて、

住なれし鳥ならませばみそのふの
しげみがくれにねぐらしめてん

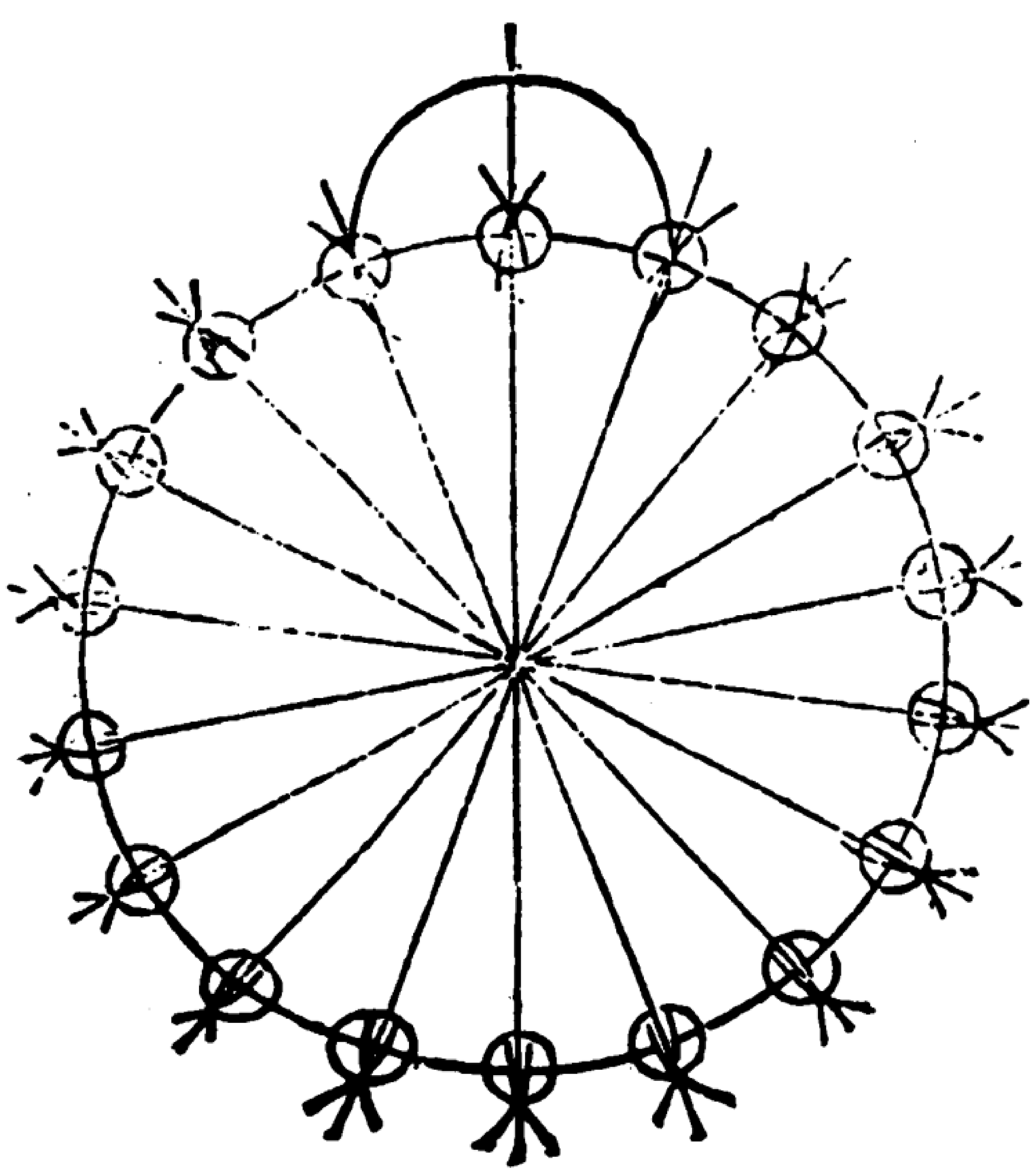
と、れもふも物くるはしきや。

賴文曰、つぞらかに庭園のありさまを寫して餘蘊なし記事文の好模範

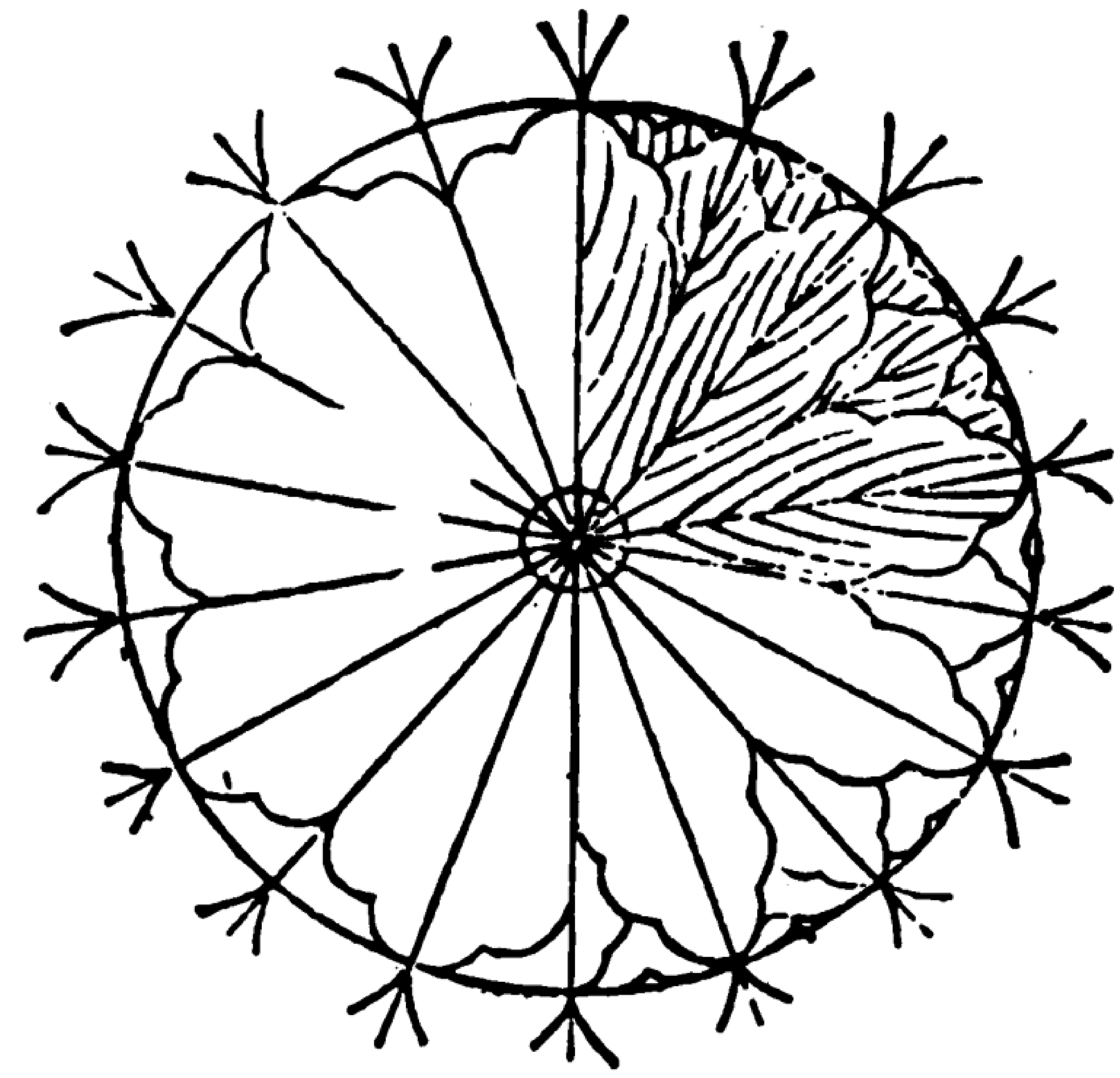
紋帳圖式綱目

井上賴文寄贈

九つ物但十八の割

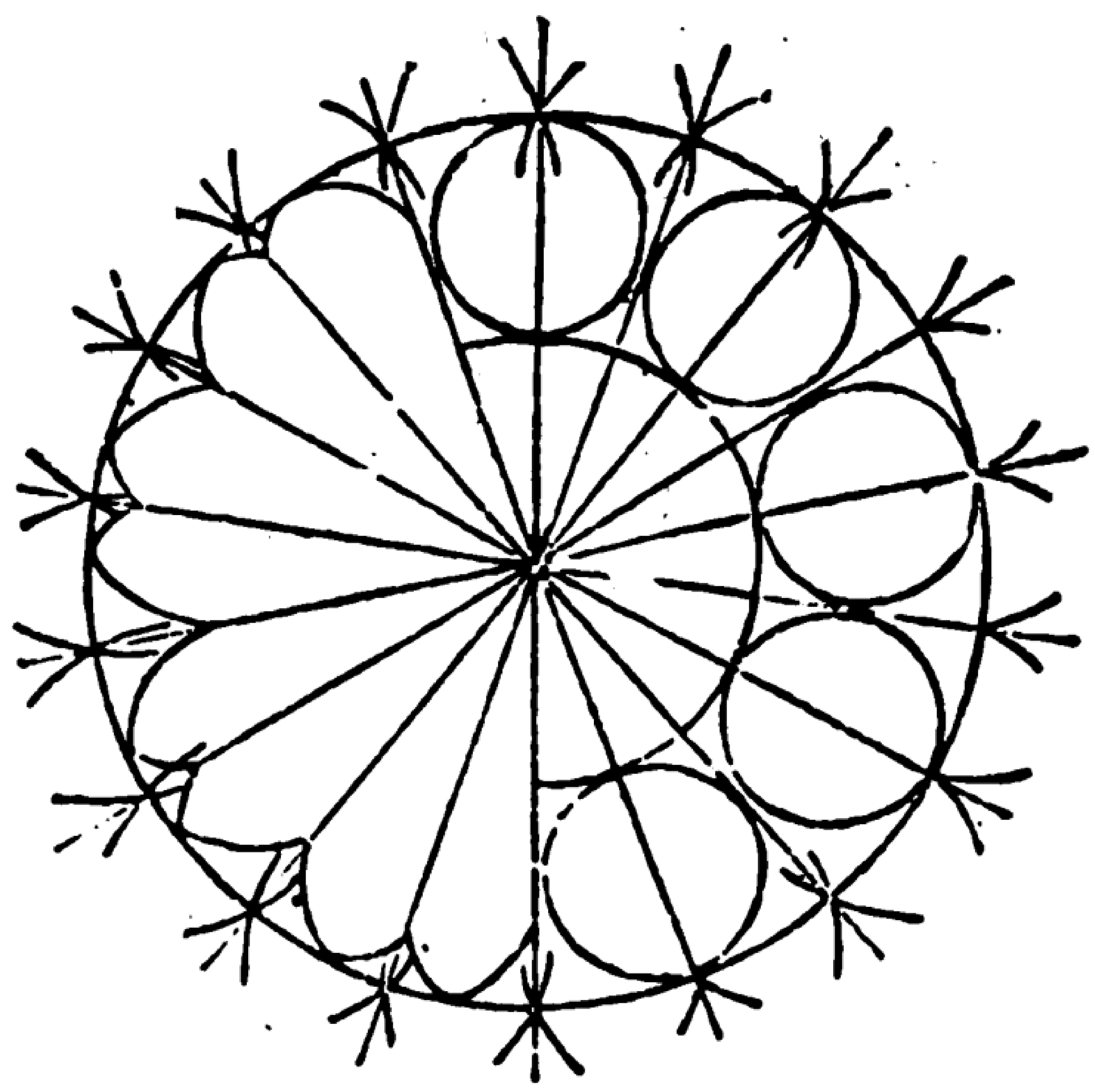


かさね柏



九つ
からはな

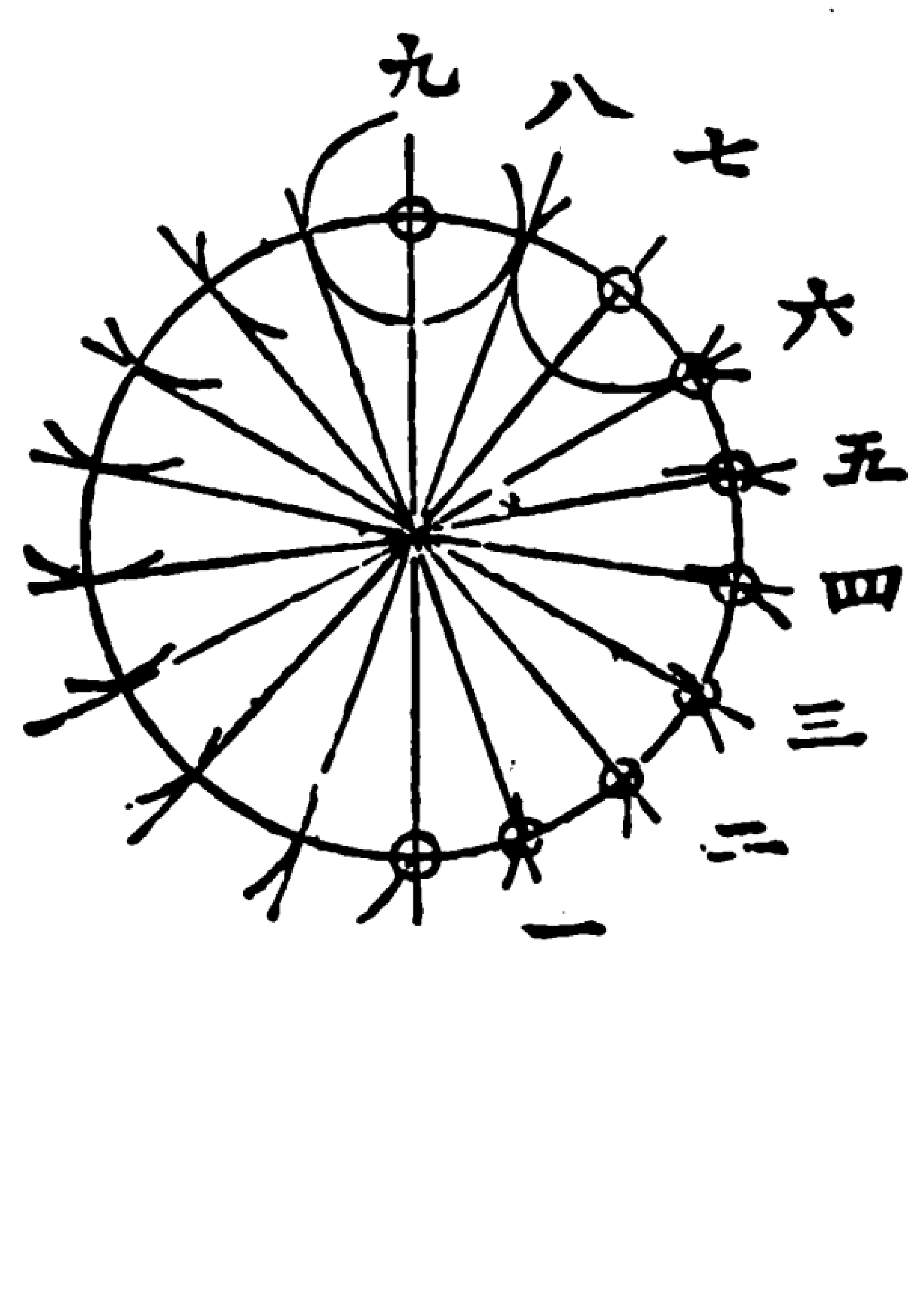
十よう



九つ
さくら

右之類は圖の如くなり。但割五つ物同斷、一二三四五六七八九とかたはしよりよみ割りにすべし、兩方にて十八となるなり、

但割方如此



歳暮走毫

石榑青苔

人の世をわたるは、滊車にのりて、果なき旅にものするが如しともいひつべきか。

われ等がすめる地球は、大きなる室にして、そのめ

ぐるは、列車のひまなくすゝみて、休む時もなし。雪ふりつもる高嶺ありと見れど、花さきつゞく小山あり。虫なきさけぶ廣野ありと見れど、雁とびちがふ長濱あり。玉をちりばめ金を飾れる樓臺立つゞき、繁華を極めたる市街去れど、茅のさきをきらず草の生ふるに任せたる柴の戸草の庵三つ四つ二つ、淋しさ限なき田舍來り、青葉茂れる森林、さては水草を追ふ沙漠、見る目ひまなくかはりゆくに、ある時は鶴が音ゆたかに、大空拭ふが如くはれて、心地すが〳〵しく、ある時は霖雨をやみなくふりつゞきて、袖のひる間もなく、風あるゝ朝、吹雪はげしき夕、時うつり、氣あらたまり、日として、夜として、同じ折もなし。こはこれ人の世のうつりかはる樣ならずや。

こゝに、父母兄弟、親戚故舊、貴賤老幼、知るも知らぬも、みな一室にあり。かれ親しきもあれど、うときもあり。愛しき人あれど、憎き人あり。喜ばしき折のみならず、腹だゝしき時のみならず。苦しき時あれど、樂しき時あり。悲しき事あり。嬉しき事あり。笑ひてくらし、泣きてあかす。これ自然の然らしむるところ。

三十の小驛には、悉く小停車場あり。十二の中驛にも、また悉く中停車場あり。さて一の大驛ありて、こゝには大停車場の設あり。こゝを境とし、又さらにあらたまりて、同じ樣に小をつみ、又中をかさね、大に及ぶ。されど一たび去れど、又同じ驛は來らず、來るごとにみな異なれり。さはいへこの停車場たるや、たゞ名のみにし、一分間も待たず、待たずといへど、いつにてものぼり、いつにてもくだるを得。天の益人一日として、一人ものぼらずといふことな

く、又下らずといふことなし。この上るは、上らんと思ひてにはあらず、上らねどもあらぬによりてなり。下ることも又しかり。上らざることに下るまで下らず、下らで又上るべきことなし。あるが中には、こと世界より復り來て、あるは閻王の廳を經て來れりといひ、あるは地藏の手よりかへされつといふもあれど、算ふべきほどもなしとぞ。されどいかに下らじとすまふとも、時來らで常ならぬ風に迎へられ、定まらぬ雲と立のぼりて、たゞしる人ぞしる、語り草に、書の上にのみ見るを得るのみ。されど大かたは大驛五十ばかりのほど此處にあるを常とすれど、早くのりておそく下るもあり、おそくのりて早く下るもあり。甚しきは今のりしかと思へど、早く形をとゞめぬもありけり。

かゝる中にも、よき人さかしき人は、いつまでも殘れる人の鑑となりて、万世までも其功を失はず、くさ〳〵の手段によりて、其名をきゝ、其姿を見ることを得るなり。されど名と功とをのこさんものとみなつとめはげむなるべし。かくてこそ何の世紀の頃、某といふはものあり、某といふ物しり人ありしなどいひはやすなりけり。

むかしは其車の中には、上中下等を幾きだとなく差別ありしが、今は大かた一つしなとなりて、ことごとに權利などいひしらふやうなり。殆天より定められたる女子さへ、口にしか〳〵いひしらふやうになりにたりときく。あらず片隅の方にはなか〳〵にはやく男の頭さへらるゝもあるとなり。

そは兎まれ、今や大驛ま近くはせ來り、氣候風土も亦一變せむとする場合となりぬ。くはしくいはゞ、乘りと乘れる人々、誰にもあれ、大驛の一たび來る

ごとに、下るべき時は迫れるなり。さるをそれと去らぬものもなけれど、さりとては又さる用意もせず、遂には名もなく功も立てずてはつるがいと多しとぞ。

れよその車にのれる、いかでか車に乗るといふが目的ならめや、乗れど必乗りしにふさはしきわざなかるべからず、くはしくいはゞ、やがてわがゆかむと思立ちし旅をはたさゞるべからず、その地につかず中途にてくぢけ、はた日も足らずなど歎くもの、われはその心を知るを得ず。たゞのりてたゞ下る者、これを浮浪人といふ。乗る、希くはその誹をうけざれ。大驛を過ぎて、後の方大驛を顧よ、たゞ目の前ならむ。さてもこの先なほ然るべきもの。其心してすゝまむ、よしや道いかに遠しとも、任いかに重しとも。

春まちてれそしと思ひし古の心も年とかきくれて、筆のすゝみもはかどらぬ老のくり言。めぐるは早きうき世のをぐるま、またわが如き人ありて、ふたゝび繰言重ねざらむ爲にもとで。

東京廿四景（十三）

蓬の屋女史

神田明神

万代橋を北にわたれど、左の方は一帶の本郷臺なりその南端は延びて駿河臺に及ぶ。駿河臺と本郷臺との間には、江戸川溶々として流れ、百艇朝に上り千櫓夕に下る。川に臨みて、欝として、森なせるはこれ昔の聖堂なり。孔子茲に釋奠せられ、天下の書生みな茲に及べり。入徳門なほ存し大成殿なほ存すれど今は教育博物館にあてらるれどよろずまた昔の

れもかげをとゞめず。聖堂の森の方、華表亭然として立つ。これやがで神田明神なり。輪奐宏壯、樓門いかめしく靈驗はたいやちこなる御神にれはす。都にて日枝神社と對立せる唯一の大社なり。され



む、年々の大祭も日枝神社と其盛大を爭ひて都下の壯觀なることは今更說くを要せず。境内には木立ありて、ものしづかに、綠陰の下、淸凉掬すべく、一方は懸崖に臨みて、眺望いとよし。樓門の側に開化樓といふいと大なる割烹店ありて座して風景を賞するに便なり。鱗の如き屋瓦直に脚下より起りて、そのつくる所を見ず鐵道馬車の往來いへは便なり、人力車の旁午し、行人の雜沓するさま手に取る如く見ゆ。北にわたりて鬱蒼たる岡は上野公園なり。それより眼を右に轉ずるに凌雲閣あり、五重塔あり、淺草の本願寺も見ゆれど築地の本願寺も見ゆ。幾所の烟突、烟を吐いて、春ならねど大空は常にかすめり夜に入れど、万火天を燒く。ことに日本橋通りの兩側瓦斯燈は遠く相連りて、二つの赤柱天を貫くに似たり。不夜城とは、かゝる眺をや言ふまし。浴を終へて、欄に倚れど万里の長風夏を空しうすべく、火閣を擁して杯をふくめど、滿目の銀世界、頓に塵寰を白了す。げにをかしきは、こゝのながめなり。神の靈驗もとこしなへにして。

朴平（十一）

白魚女史

さらでも母の膝下のなつかしきは、なべての世の娘心、まして昨日今日なれにし里をはなれ、都とは云へどしらぬ里に、うき事をつみにつむ百代のくるしき心には、一入に母を呼ばぬ日はなく、母樣のましまさむと、げに思はぬまはなき折りから、その母の文、そのなつかしき母よりのこまぐ〵の文。見ては、一入になつかしう、故鄕をしたふ涙は、げにふりまさるを、きつと思ひしばりて、椽に立ち出で、庭の

れもてをうち守りたりしが、やがてつと立ち下りて、白菊の花一枝二枝手折り、朴平ゆるしてよ、そちがつくりし花、をしけれど、あまりにうつくしければ、御佛への手迎けにゆるせよかしとて、うるみし目元にくるしき笑をつくり云へど、あなよき御心ぞへなに、それこそは朴平の冥加とればかり、涙を掌にはらうて笑ふもあはれ。百代はやゝしばし佛間にこもりしが、何をかまたつく／＼とれく露を、袖にぬぐひながら、またもや文雄の書齋に來り、朴平がはやもはき終りしを見て、退儀なりしよ、妾にまかせておきくれなどよきにと云ひつゝ、其處等見亘しながら、またもや庭に下りたちて、朴平よ、此の陰の枝を今一枝二枝、な怒りそ、汝が君に千代をそへんとてなれぞとは、笑みながら、手折り來りて、花瓶に、姿も心もやさしううつしそふるに、朴平はたゞうれしく、我が君はともあれ、君が君、千代はものかは、八千代も萬代もそへ給へとて、いそ／＼と下り立ちて、自らもまたよき枝を二枝三枝折り來りてそへ、さても／＼みごとうつくしう活りし事よ、かくては花も如何ばかり甲斐ある心地致し侍らん。之には誰が如何なる君も他處へはと、心よりほめそやすに、百代ははづかしう、田舍の手振りも、なかなかに都に變はりたるが、さこそめづらしうてかと、しむしながらも笑ひなぐさむは、花の德。

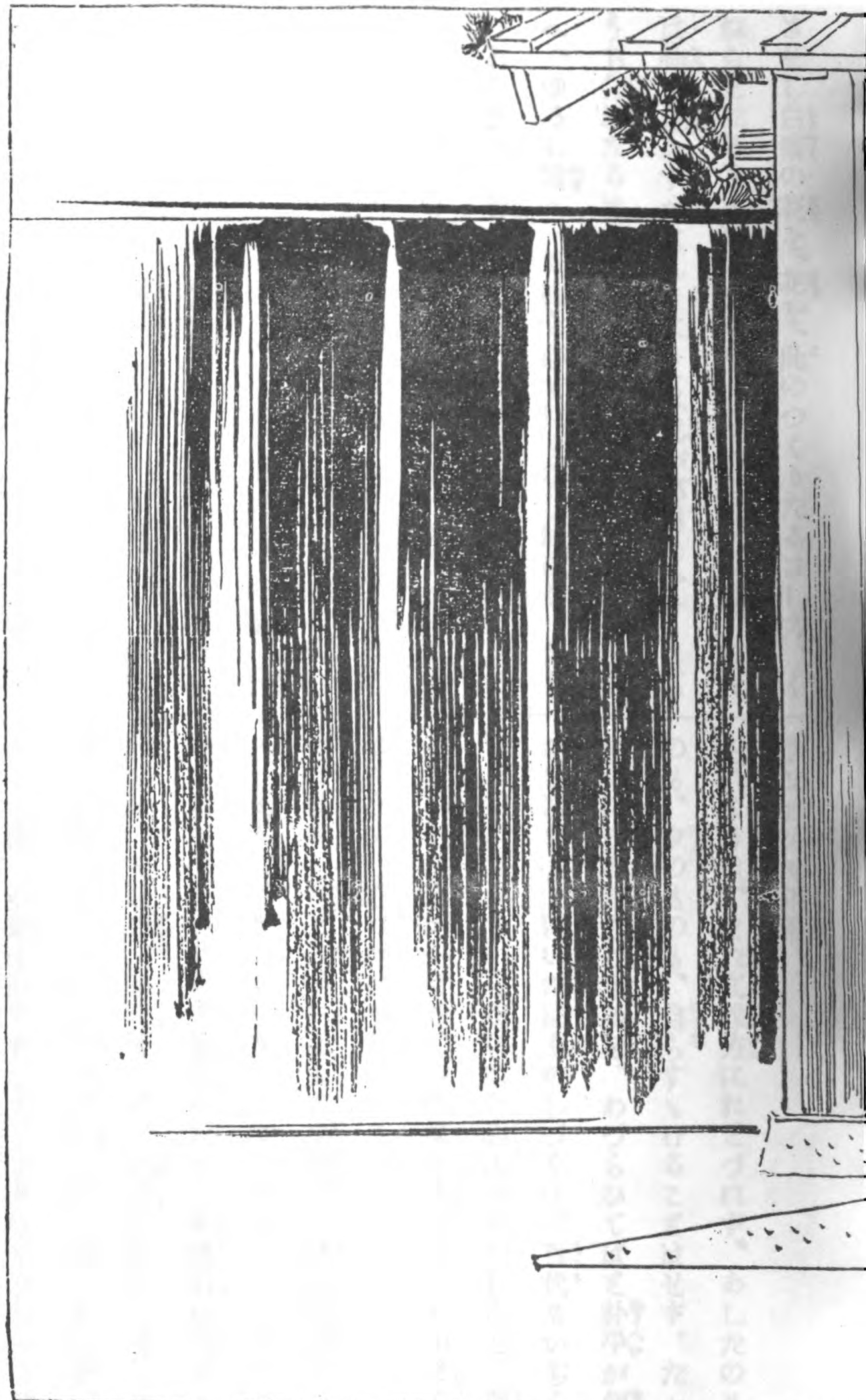
やがてその日もくれはてたれど、主人は歸り來らず。おぼつかなく二人はいつか／＼とまつ九時にも近き頃、文雄は歸り來る門、流石にきげんよげに、朴平を呼ぶに、二人はうれしく急ぎ玄關に立ち出れど、彼方は百代のかげを見て、にはかに興さめ顏に眉をよせて、そのまゝ言葉なく書齋にひきこもりぬ。れ火

よゝれ茶よと心をつけて百代の持ち行くも、例のふりむきもせず。筆立、硯箱、わら〳〵しく置きなほしなどするに、する處のかはり侍りてかと、はゝ笑みてとへど、答はなく、傍の書物ひき出して、また他處も見ぬとは、あまりによめぬ人かな。百代は例の顔をあかくそめなして退く己が部屋、せきにせきし涙は、あふれにあふれて身も沈みはてんむかりなるを、やう〳〵に忍びて、さし對ふ机の前、青柳のやさしきふしにかしづけよとの先きの母よりの玉章、くりかへし〳〵よみて、またもや涙をしぼりつゝ、

青柳のいとのやさしきみをしへを
くりかへしてぞ春をまちぬる

不束ながら一すぢに、必ず案じ給ひそ、今日此の頃はふる里の空もながめでと、わざと言葉少く、墨色こく母への返り事、封ずるも中々にくるしからん。やがて枕につきしかど、心はつゆ休まず。彼方此方と思ひわづらひ、ふしわづらふ長き夜は、あくるとつぐる鳥の聲のいつしか耳にひゞくもうれしく、おきてくりやの事、みづからがとも思ひたれど、さりては朴平の中々にくるしく思はんとて、なほしばしとてふしわづらへど、窓ひきあくるは朴平ならん。朴平も、朴平も訝かし。けはひも音も何となうさねをるは、よべもねぶらざりしならん。ふびんや我故にと、はや涙の出るを、朝まだきより不吉なと、自ら叱りて、雨戸ひきあけ、朝きよめなどなし終りて、とりゆく顔の湯、いつものぬれ椽に、文雄様と聲かくるもはづかしう、答へぬを習ひと、そのまゝに去らんとせしが、聞ねではと、またひきかへして、そつとふすまをさしのぞけど、文雄は、文雄は、昨日



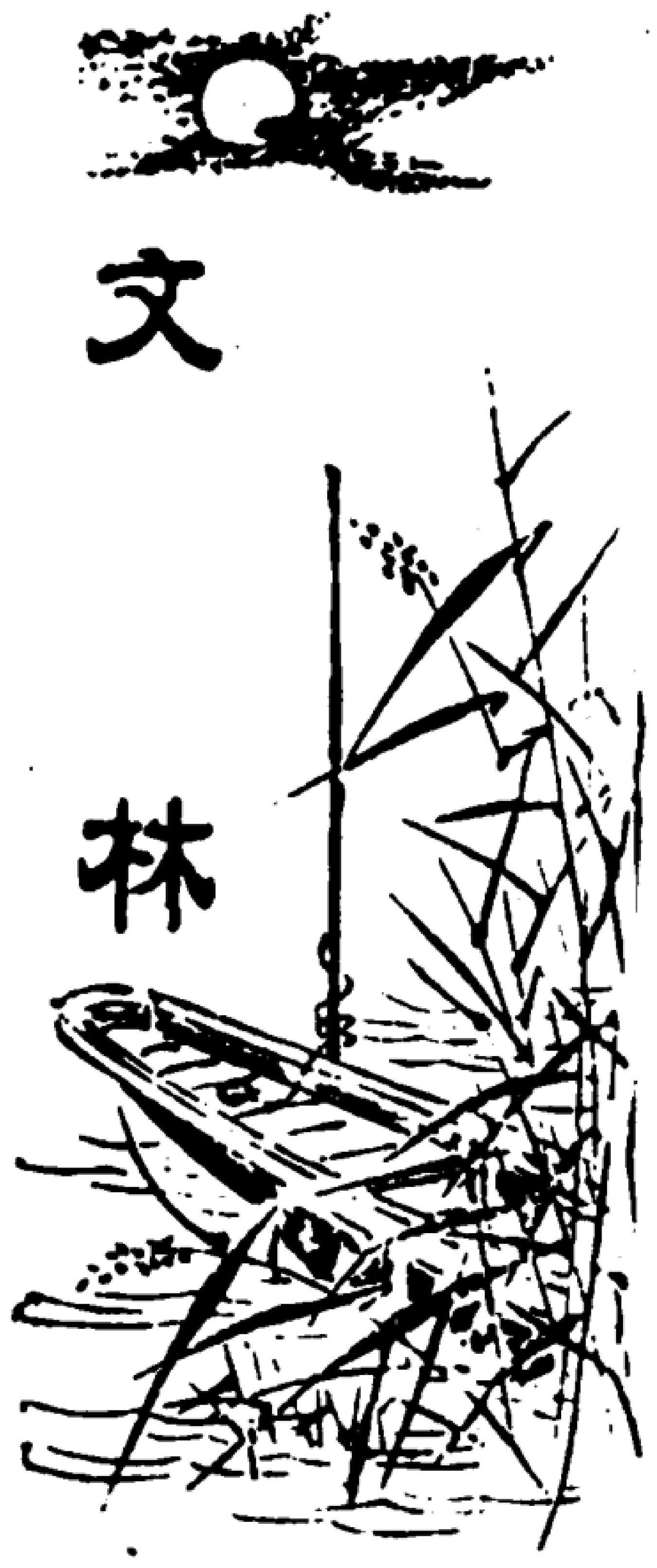


させし白菊の花を、花を、此のつくりたるさし方、くねらせたるさまはとて、とりすてんとする樣、百代は物も覺えずかなしくなりて、己が部屋にかけこみ、うち伏れたるまゝ淚に正体もなく、父上樣ゆるし給へ、ゆるし給へ、母樣を必ず叱りなし給ひそ。自らのあやまり、妾のあやまり。母樣、母樣、母樣の、ぞのやうに心付け玉ひても、文雄樣は、かなしや文雄樣は、妾をれとしはて給ひてなり、母樣、不束なる妾は、如何樣に心をつくし侍りても、文雄樣の御心をなごめ侍ることは叶ひ侍らじ、もはや、母樣、妾は生きては、古里へ歸へらんも、此處にかくてあらんもいやなり母樣、妾は、いつそ、妾は、今、此處にて。文雄樣にはつれなう捨てさせたまふとも、伯母樣、伯母樣、伯母樣ぞかりは、どうぞ妾を嫁ともればして、れそぞへよび給へとて、前後もわかず泣きまぞふも道理。

それよりは、また文雄方にれとづれず、あしたのものも、夕のものも、自らすゝむることはせず、たゞ部屋にのみとぢこもるを、わづらひてはと朴平が何かとさまぐ\にいたはりかしづくに、百代もいぢらしく、よし、つらからぞれなじ心につらからんと、强ひて心をひきかへせど、つれなき人をとひわぶる心はれきふし心づかひもあはれや。

今日は十一月三日のひるよと小供等の歌ふ唱歌もひゞき亘りて、うつくしう、げに日もうら〳〵とめでたくかゞやきわまる天長節の祝日、文雄君は今日も穴にか、やは翁、あらでかと、大聲にれとづるゝは例の春野、きゝつけし朴平は早く出で迎へたれど、入らせ給への聲は出でずして、はやむせびかへりぬ文雄もきゝつけて出で來りやは春野君、思ひがけな

や、上り給へと云ふに、なに上れと、心なき事を云ふよ、君は此のかしこき日の光りを、穴にてつぶすつもりか。文雄君、今日は男、たゞの男になり給へ文にいとまやり給へ、いざ〳〵僕とつれ立ち給へ。何處へぞと、何處でも僕がひく處へ、朴平との、そちもろともに來給へ、ちよんまげもおれも白し、頭も白うおもしろの世やなど、例の心かるげに、ひとりおもしろげに、たはぶれいふに、朴平も思はず笑ひをもよほされしが、つゞくは涙。ちよんまげは心細うてと頭をなでゝまぎらすを、朴平どのよめたり〳〵、さやうにむせぶるゝな。文雄君、早う羽織着かへでも、君に似ぬ事や、きかへしとてきれいになるでもなきになど、ひとりいひつ笑ひつしてせき立て出で行くうしろかげ見送る朴平、彼方にも窓より陰ながら。



文林

氷　近衛忠煕

けさよりやこほりそめけん足引の
山したみづのおと絶にけり

森時雨　東久世通禧

落葉してあらはになりし山もとの
もりかげくらく時雨ふるなり

幼稚園　高崎正風

はゝそのかげを離れて二葉より
をしへ草つむよとなりにけり

冬雨　前田利嗣

遠やまは雪やふりけんあかつきの
まどうつ雨のおともさむけし

山路落葉　西四辻公業

あしひきの山路に殘るきくの香に
匂ひあひてもちる紅葉かな

冬野　松浦詮

秋はてゝ千草のはなはあともなく
かれたる野べにあき風ぞふく

冬木　津輕承昭

夜あらしにみねの梢はちりにけり
けふは谷まのもみぢたづねん

幼童　諏訪忠元

こゝろして敎へさとせよ難波江の
よしあし共にならふうなゐは

池水鳥　宮地嚴夫

池のおもはむすぶ氷にとぢられて
みぎはにのみぞ鴨のつどへる

落葉入簾　小出粲

巻あぐるをすの外山のこがらしに
そでのうちまでちる紅葉かな

夜落葉　植松有經

あすも亦見んとおもひし紅葉を
夜のまにかぜぞ吹ちらしける

冬川　鎌田正夫

わがかどのくぬぎのはやし冬枯て
田がはの末ぞ見えわたりける

惜月　大畑弘國

かたぶくは月のならひと知ながら
こよひはわきてをしき空かな

暮秋雨　藤井行麿

ゆく秋のわかれをちかみふる雨は
一日だにさへいとはれにけり

在原業平朝臣　三浦千春

小野山の雪ふみわけしまごゝろの
跡は千世までのこりけるかな

都へかへる人に年ころ手ならしたる急須をれくるとて　佐藤清臣

こきうすき染め敢へぬ色の紅葉も
みやこのつとゝいふぞ嬉しき

小松あり鶴をり　三輪義方

かぎりなき小松が原にきくときは
いよゝのどけしあしたづの聲

冬竹　伊東祐賢

岩もぬくやたけごゝろの失ぬべき
雪にはしどしよしたゆむとも

河上落葉　安齋篤敬

川長のみのはにしきとなりにけり
散るもみぢ葉の下にねぶれど

惜月　松本操

月影はいりがたとはくれもふまに
ねたくもかゝる峯のうすぐも

高樓に月を見て　黒崎仙太郎

秋風にくもはれてゆくもちづきの
かげさやかなり夜や更ぬらん

夜聞水聲　木庭芳香

時雨かとおどろく窓につきさして

聲すみわたるやまがはのみづ

植竹寫友　石原均

うきふしも嬉しき節もわがともと
　植ゑて世を經んまでのくれ竹

歳のくれに　氷石德文

惜めどもとまらですぐるひと年は
　またも我が身に積るなるらん

竹霰　蜂須賀隨子

かぜそよぐたけのしげみのたま霰
　音ばかりしてたまらざりけり

海眺望　近衛貞子

あびきすとむれゐる海人が賑ひは
　辛きよわたるしわざともなし

冬夜　前田朗子

おくしもにたへずちりゆく紅葉の
　音もきこえて夜はふけにけり

爐邊歲暮　柳原愛子

をしと思ふ日かずもいまは埋火の
　有かなきかにのこるとしかな

ある女學校のもとめによりて　税所敦子

をとめ子の學びのまどのくれ竹は
　節たゝさるやみさをなるらん

寒夜衾　松平健子

厚ぶすまかさねても猶さむけきは
　ねやのうちにも霜やおくらん

初雪　保科節子

都路はまださえぬともおもはぬに
　はつゆきふれりをつくばの山

歳暮　日野西廣子

中々にけふをかぎりとなりしより
くれゆく年ものどけかりけり

寒松　小池道子

木枯のこゑたてそめしやまゝつは
ときはながらに冬をへるらん

冬嶺　三宅龍子

都にはいつかふるらんけさ見れば
初ゆきおろしちゝ父甲斐が嶺

閑庭雪　鶴久子

小車のおともきこえぬやまかげの
にはわづかにそつもる雲かな

山家落葉　河村重子

山まどに椎の實ひろふあげまきが
みちたどるまでちる木葉かな

木枯　柴田靜榮子

もみぢ葉やちりまがふらん月影の
折〳〵くもるよはのこがらし

道行人時雨にあへり　安東菊子

晴るゝまをまつの木陰も有ものを
しぐれにぬれてゆく人やたれ

菊花久　清水靜子

わが宿に千年をかけて咲き出し
菊のさかりは長くもある哉

雜報



●おほみゆき、
天皇陛下には去し三日、伏見宮御邸にみゆきあらせられ、十日には、赤坂離宮にいでませ給ひて、乗馬を天覧あらせ給ふ。
皇后宮陛下には、去し二日、横須賀軍港にいでまさせ給ひて、收容軍艦鎮遠號を、みそなしたまひ、九日には、伏見宮御邸に行啓あらせ給へり。
皇太子殿下には、去し五日には、千葉縣下、葛飾御料地に、御遊獵あらせられ、七日は、横須賀軍港にいでまして、鎮遠號をみそなはし給へり。
●光格天皇御親祭　去し十二日、宮中にて、御親祭あらせ給へり。
●おほみめぐみ　和歌山縣、東牟婁郡新宮町の、かぐつちの火の災にかゝれるを、あはれときこしめし給ひて、聖上　后宮兩陛下より、いにし三日、金千圓をめぐませ給へり。
●東宮殿下の御馬術　天皇陛下の大御心を武事によせさせ給ひて、おほみいとまには、御馬に召させ給ひて、ものせさせ給ふよしは、はやくもれ承はりはべるに、東宮殿下にも、その大御心にならはせ給ひて、御課業のおんいとまごとに、御馬に召させ給ひて、御術を鍛へさせ給ふに、このほどは、大に御

上達あらせ給ひて、斯の道に秀でたる乘馬士官も及ひ奉らぬほどなりとぞ承る。

●皇太神宮の奉祝祭　こん三十年は　皇太神宮のいまのさく鈴の五十鈴の川上に鎮座まし〱し　垂仁天皇の御代の二十六年より、かぞへ奉れば千九百年にわたるをもて、去歳戰勝の慶事にあはせて、こん三月十日より、五月十八日までの間　奉祝祭をせんとて、神宮敎院にては、會員を募集すときく。大御神も御心うれしときこしめし給はんかし、あなかしこ。

●玉川の　武藏の國、西多摩郡、端村の玉川上水の水源に、水神祉といふ祉あり。このほど再建の工事をへたりといふさて、久我東京府知事は、有志の人の需によりて、巾三尺、たて二尺五寸の額面によみたる歌をかきて奉れりといふ。その歌、

玉川のみな口守る此の神の
清き恵は万代にまで
正二位　侯爵　源　通久　謹詠

●敎員檢定試驗規則　尋常師範學校、中學校、高等女學校、敎員檢定試驗規則は、去し二日、文部省令、第十二號をもて、發布せられたり。

尋常師範學校尋常中學校高等女學校敎員免許規則を定むること左の如し

明治二十九年十二月二日

文部大臣　侯爵　蜂須賀茂昭

尋常師範學校、尋常中學校、高等女學校、
敎員免許規則

第一條　尋常師範學校、尋常中學校、高等女學校免許狀は文部省の檢定に合格したる者に之を授與す但左に掲ぐる者には文部大臣の適當と認むる學科目に限り當該學校長の稟申に依り敎員免許狀を授與す

一高等師範學校及女子高等師範學校卒業生

一高等師範學校及女子高等師範學校專修科、撰科卒業生、高等師範學校附屬音樂學校師範部卒業生
一東京美術學校特別課程卒業生
一元東京音樂學校師範部卒業生
一元體操傳習所卒業生

第二條　檢定は試驗に依りて之を行ふ但第十條に揭ぐる者にして試驗を要せずと認めたるものは此限にあらず

試驗を分ちて豫備試驗、本試驗の二種とし豫備試驗は地方に於て之を行ひ本試驗は東京に於て之を行ふ但豫備試驗に合格したる者にあらざれば本試驗を受くることを得ず又學科の種類に依り又は學科目を限り試驗を施行する場合に於ては豫備試驗を省くことあるべし

尋常師範學校、尋常中學校敎員に係るものは高等師範學校の學科程度に尋常師範學校女子部、高等女學校敎員に係るものは女子高等師範學校の學科程度に準じ總て敎授法を併せて試むるものとす但學科の種類に依りては其程度を斟酌することあるべし

第三條　試驗は毎年一回第九條の各學科目を通じて施行するものとし時宜に依りては其學科目を限りて臨時に施行することあるべし

第四條　試驗施行の場所、期日、出頭期限等は豫め之を告示す

第五條　檢定は文部大臣の命じたる檢定委員之を行ふ

第六條　檢定を出願したる者は左の資格を具ふることを要す
一年齡男子は二十年以上、女子は十八年以上
一身体健全
一品行方正

第七條　檢定を出願する者は族籍、氏名、住所、生年月及志願の學校、學目を記したる願書（一號書式）に左の書類を添へ地方廳を經て文部省へ差出すべし地方長官は本人の品行に就き意見を附記することを要す
一學業、業務、賞罰等に關する履歷書（二號書式）及學業證書免許狀の寫

二呼吸器、神經系、皮膚視官、聽官、言語其他身體に關する官公立病院醫師の檢査書（三號書式）但官公立病院に遠隔の地にありては內務省の試驗に依り又は大學、高等學校、府縣立醫學校を卒業し免狀を得たる醫師の檢査書を以てするも妨なし又實地體格の檢査を必要と認めたる者に就ては試驗の際檢査委員之を施行す

第八條　檢定を出願する者は其一學校に限るものと二學校以上に涉るものとに拘はらす出願學科一科目に付檢定手數料金貳圓二科目以上は一科目每に金壹圓を加へ納むへし但第十條第一項二に依り檢定を出願する者は檢定手數料を納むるを要せす

第九條　檢定は左の學科目に就き之を行ふ

尋常師範學校敎員檢定學科目

修身　敎育　國語　漢文
歷史　地誌　地文　數學
簿記　物理　化學　植物
動物　生理　鑛物　習字
毛筆畫及用器畫　鉛筆畫及用器畫　音樂　普通體操
兵式體操　英語　獨語　佛語
農業　商業　手工

尋常中學校敎員檢定學科目

倫理　國語　漢文　歷史
地誌　地文　數學　測量
簿記　物理　化學　植物
動物　生理　鑛物　習字
毛筆畫及用器畫　鉛筆畫及用器畫　唱歌　普通體操
兵式體操　英語　獨語　佛語
農業　商業　工業

尋常師範學校女子部敎員檢定學科目

修身　敎育　國語　漢文
日本史　萬國史　地誌　地文
算術、代數、幾何、　理科　家事　裁縫
習字　毛筆畫　鉛筆畫及用器畫　音樂
普通體操

高等女學校敎員檢定學科目

修身　國語　漢文　日本史
萬國史　地誌　地文　算術、代數、幾何、
理科　家事　裁縫　習字
毛筆畫　鉛筆畫　音樂　普通體操
敎育　手藝　英語　獨語
佛語

修身と倫理、音樂と唱歌は同一の學科目と看做す

第十條　左の一に掲くる者は文部大臣の適當と認めたる學科目に關し二に掲くる者は其免許の學科目に關し三に掲くる者は其敎授したる學科目に關し試驗を須ゐすして檢定を行ひ免許することあるへし

一帝國大學分科大學卒業生　元東京大學卒業生
元工部大學校卒業生
帝國大學分科大學撰科修了生
帝國大學文科大學元古典講習科卒業生
帝國大學理科大學元簡易講習科卒業生
帝國大學農科大學乙科優等卒業生
高等學校卒業生　元高等中學校卒業生
札幌農學校卒業生　元駒場農學校卒業生
元東京農林學校卒業生　高等商業學校卒業生
元東京商業學校卒業生　東京工業學校卒業生
工業敎員養成所卒業生
元東京職工學校卒業生
東京美術學校卒業生
高等師範學校附屬音樂學校卒業生
元東京音樂學校卒業生

二敎員たらんと欲する所の學校の學科程度と同等以上の敎員免許狀を有する者

三敎員たらんと欲する所の學校の學科程度と同等以上の官立學校に於て一個年以上敎員たる者若くは敎員たりし者

陸軍敎導團步兵科卒業生兵式體操に關し前項一に準することを得

第十一條　前條に掲くる者は臨時檢定を出願することを得但試驗を必要と認めたる學科目に就ては次の試驗時期に於て更に手數料を納めすして直に本試驗を受くることを得しむ

第十二條　第十條第一項一に掲ぐる者は當該學校長を經て檢定を出願することを得其二に掲ぐる者にして文部省直轄學校に係る者亦之に準す

前項の場合に於ては當該學校長は本人の學力、品行、身體に關し意見を付して具申すべし又第七條に依り願書に添へて差出すべき書類は履歴書の外之を要せす

第十三條　本試驗に於て一學科目の全部に合格せざるも其或部分の成績佳良なるときは其分部に對し證明書を授與することあるべし

前項の證明書を有する者は其後の試驗時期に於て前に出願せし學科目に就き更に檢定を出願するときは證明書に記載したる部分を省き其他の部分に就き試驗を行ふ但證明書は三年間有効のものとす

第十四條　免許狀を授與したる者の免許の學科族籍氏名等は官報を以て之を公告す

第十五條　第十條第一項二に依り更に免許狀を受くる者及免許狀を毀損亡失し若くは氏名を變更したる等の爲其書換を出願する者は免許狀一通に付手數料金壹圓を納むべし

第十六條　檢定手數料及前條の手數料は登記印紙を用ゐ願書に貼付すべし其既に納めたる後は何等の事項あるも之を還付せす

第十七條　免許狀を有する者左の事項の一に當るときは其免許狀を褫奪す

一禁錮以上の刑に處せられ又は信用若くは風俗を害する罪を犯して罰金の刑に處せられ又は監視に付せられたるとき

二破產又は家資分散の宣告を受けたるとき

三荒酗暴激其他總て敎員たるの面目を汚したる行爲あるとき

第十八條　地方長官に於て前條の處分を要すと認むる者あるときは文部大臣に具申すべし

附則

第十九條　明治十九年文部省令第二十一號明治二十五年文部省令第十三號明治二十七年文部省令第八號は之を廢止す

第二十條　本規則第九條檢定學科目中數學の試驗は明治三十一年以後にありては算術、代數、幾

何、三角法及解析幾何大意、微分積分大意まで
を併せて出願するにあらざれば検定を行はず
（書式は略す）

●文部省告示　いにし五日發布あり、教員試驗を受けんと思ふものゝためにとて、のせつ。

本年文部省命第十二號尋常師範學校尋常中學校高女學校教員免許規則第三條前段に依り來明治三十年四月より試驗施行すへきに付其試驗を受けんと欲する者は同年一月十日までに願書を地方廳に差出し地方廳は同年二月二十日までに當省へ差出すへし但試驗の場所期日等は更に告示すへし

明治二十九年十二月五日

文部大臣侯爵　蜂須賀茂昭

●女子高等師範學校入學試驗　は去し二日、東京府廳にて、行ひしが、受驗者は二十四名のよしなりかくて八日には、入學生撰擧試驗を行へりとなり。

●大日本教育會總集會　去月廿八九兩日に、第十三回にあたる總集會をもよほせり。まつ規則改正案を議決し、常議員二十名を三十名に増して改撰を行へり。又會長の改撰をも行ひて、近衛篤麿氏撰にあたれり。蜂須賀文部大臣も臨場ありて、戰後の教育は、官民力を協せて、其の發達進歩を圖らざるへからす。殊に國体を重むし、德育を普及せしむることは、本會の盡力を切望す云々、其の他來賓諸氏の演説もありて、いと盛會なりき。

●戰史　廿七八年役戰史といふものは、參謀本部編纂課にて、ものせらるゝなるが、大本營の計畫をはじめて、各部隊の運動、兵站部のことに至るまで部門をわけて、いと詳に、ことに戰術に心を用ゐらるゝときゝつ。この文なれるうへは、陸軍大學校、士官學校の教科書に充つべく、且英佛獨の文にも飜譯すべしといふ、かの國の人ども、これを見なは、かはれる眼の色も、今一度かへつべし。

●足れりとすべからず、あるが中にも、機械の類は、さま〴〵に工夫して、益精巧を極むべきわざなり。今わが國にても、日にまし新しくなりゆくに鐵道及機關車などは、十年この方、いさゝかもかはらずして、もとのまゝを用ふるなるが、これにては一時間平均十八哩、または二十哩の速力なるに、歐米にての新式のものは一時間に、四十哩をゆくべしといふ。かくて、我が國より、注文するは、みなこの舊式のものなれど、英國などにて、十年以前のすたれたる舊摸型をも、わざ〳〵日本の注文のために保存するさまなりといふ、かくては如何はせん。彼の國を待ずして、我が國より新式のものを製出せんむかりの勢に、あらまほしきなり。

●うれしき翁あり。名を三星常松といひて、福嶋縣、耶麻郡、熊倉村、大字雄國といふ所の人なりこの翁世のあはれをさとりえて、よるべなきもの、まづしきものを救ひしこと數をしらず。なかにも孤を貰ひては、心をこめて育てあげ、ほどよく大きくなれど、我が子として、他家に縁付かせしものこゝに七人もあり。このほども亦隣村の某とて、また見も聞きもせぬ人の妻、兒を產みて、肥立あしくて身失せたりと聞きて、直に其の兒を貰ひて、乳母をやとひて、はぐゝみ養へりといふ。都には、育兒會といふものあれど、勢鄙にまで及べりやいかに、むかし廣狹といへる尼、棄兒八十人あまりをひろひて育たりきといふことは、きゝつれども、いまひなの翁にかゝる人ありて、嫗にありと聞えねば、いさゝかあやしきなり。この翁齡七十路に近けれども、健かなること壯者の如く、常に和歌俳句をもて、樂みとせりといふ。その一ッ二ッ、

ひるだにもあやふき谷の丸木橋
　月にうかれて渡る夜半かな
夕日さす紅葉の中や鈴の音

●まごゝろ　かくぞかり心を深くもたざれど、なにごとも、美しき結果は得られざるべし。高橋政吉といへる人は、滋賀縣大津の生れにて、九州鐵道會社にやとはれて、工夫頭となりて、工事を監督せりさきころより、熊本縣下にて、氷川といふ川にかくる鐵橋の工事にかゝりしが、そのほどふと心臟病にかゝりて、日にそへて病も重りゆくに、少しも撓む色なく、日々水中にたちて、立ちはたらくを、人いさむれどもきかず、此橋なりをへざれど、命死ぬとも瞑せず、わが命はこの橋の成らん日にはつべし、とてなほいよ／＼はげしみしかど、工事もことの外はかどりて、ほどなく落成せり。さてその落成せし日の夕つかたに、政吉は、これにてわが望はかなへりとて、その夜身失せたりといふ。いと心深き人なりといふべし。されど、そこの鐵道の役員ども、相はかりて、義捐金をあつめて、遺族におくらんとすといふ。

●けものにも　かゝるめでたきことあり。山形縣下の東田川郡なる廣大野といへる村に、何の三五郎といへるがあり。この家にかへる猫いにし夏の末に牡の兒一ッを産みけるが、いかにしけん、ほどなく小川に溺れて死にき。されど兒猫は饑ゑて日夜かなしげになくを、これもこの家にかへる牝狗、あはれとや思ひけんおのが、乳房をそへて、育むに猫兒もいつかよくなじみて、今はさながら生の親子の如くなりといふ。けものだにかゝるを、世には継子なりとて、情もなくむごたらしく、あつかふものもあ

あるは、なけくべきことなり。

●可笑しさの好一對　こは人をそしるとにはあらず。あるまじと思ふ事のあるがをかしければなり。淡の徳島なる某酒商店より、はがき郵便もて、東京のさる書肆のもとにいひおこせたるやうは、「（上略）當縣下に於て清酒は大坂の輸入を仰ぎ請賣業者數多有之候へども四國第一の都會ながら洋酒問屋といふもの一軒も無之は迂濶千萬の至りと迂生茲に見る處ありて（中略）現今香竄、地球、朝日、惠比寿等專ら本邦産洋酒類の販賣營業致居候處今般貴店に於て紅葉山人氏の御著造なる青葡萄酒御發賣の由弊店も聊か試賣仕度に付二十ダース何程に御割引被下候や（下略）阿波徳島市〇〇町〇丁目某商店」こは、書物と洋酒とをおもひあやまれるなり、今一ッは、福島縣の郡と村はいま思ひいづべし。村長の某といふ人、いたく酒にのみ醉ひて、村會議員なる某と物をいひあらそひて、はてはいたく打ちすゑたるに、あくるあした酒さめて、そのあしかりしを悔いて、あやまり證文といふをかきて、罪をあがなふべきになれり。村長思へらく、あやまり證文といふ俗なりとて、「誤謬證書、一私義云々」とかきて某におくれりといふ。この二つ打ちそろひたるものわらひ草なり。

●新刊書のしなさだめ

〇日本お伽噺第一編、第二編、大江小波といふ人のものせるにて、むねと兒童に解し易からんやうに心せられたり、第一編には八咫烏、第二編には、田村將軍をものせり。（東京博文館發行）

〇方丈記評釋　鴨の長明の方丈記を文章の上より評釋せるものなり、かゝるものゝまれなる世の

中にいとよき企なり、あたれりやあたらずやは、しらず、文章に志あつからん人はまづ見てよ、評釋せるは中島幹事、

（共益商社書店發行）

●新年附錄豫告　こん卅年一月五日發行の女鑑第百二十四號には、新年附錄として、さる貴顯のわたりの、ものせられたる、和歌の色紙のうるはしきすりものをそへて、年のはじめのことほぎにかへてんとす、なり出でん日の五日をまちたまひてよ。

●歳暮れくりもの〻あたひ　くだ〱しかれども、をりふしのものなれど、いさ〻か便にもなれかしとてとりあつめつるなり。

鰹節
上節桐箱入、尺二三寸、一圓二三十錢より
五十錢、同尺七、八十錢より一圓中節袋入
二本、二十錢より五錢、同三本、三十錢內
外次節袋入二本十五六錢より二十錢

食鳥
靑籠一ト番ひ入一個に付ひし五圓がん三圓
五十錢鴨一圓五十錢中鴨一圓小鴨六十錢雉
子一圓より一圓十錢

鶏卵
桐箱入にて二尺二圓より二圓五十錢尺八一
圓七十錢より二圓尺七一圓四五十錢尺六一
圓二三十錢尺五一圓尺四八十五錢より九十
錢尺三六十五錢より七十錢尺二五十錢尺一
四十錢より四十五錢
ボール箱入にて尺三六十錢より六十五錢尺
二四十五錢より五十錢尺一三十五錢より四
十錢尺二十五錢より三十錢九寸二十錢より
二十五錢八寸十五錢より十八錢

砂糖
袋付一斤入稀三盆十二錢四厘極上三監十一
錢八厘極上三本引十八錢八厘並三本引十七錢
五厘極上玉砂糖八錢三厘並玉砂糖七錢七厘
無類和三盆十七錢八厘花見十二錢四厘初雪
十一錢八厘天光十錢二厘

角砂糖
一函に付二斤入三十錢四斤入五十五錢八斤
入一圓十二斤入一圓五十錢

乾海苔
桐箱十帖入五十一錢同七帖入三十八錢同五
帖入二十九錢同三帖入二十錢○武力箱十帖
入四十九錢同七帖入三十九錢同五帖入二十
七錢同三帖入十八錢同二帖入十三錢○紙函
十帖入四十五錢同七帖入八三十二錢同五帖
二十三錢同三帖入十四錢五厘同二帖入十錢
○スタレ包五帖入二十二錢同三帖入十四錢
同二帖入十錢

乾物
北海道千〇十斤に付六十錢地製千斤同四十
錢田作一斗に付六十五錢鰊鰹一圓三十錢丹
波松茸百本入一樽に付一圓五十錢坂松茸五
十本入同八十錢

五十集　鮭一本に付大八九十錢より一圓同中五六十錢より七八十錢同小三十錢より四十錢〇鱈一圓に付上七八本より十本〇鰯同八百六七十目より九百四五十目

密柑　紀州產雲州一函に付極大玉五十錢並大玉四十五錢中玉四十錢小玉三十五六錢次品三十二三錢より三十錢位

煙草　和製刻五十匁十二錢より二十錢同百匁二十錢より四十錢同紙卷百本十五錢より二十五錢同二百本二十四錢より五十錢舶來刻ハタフライ四オンス罐入卅八錢同リチモンド同五十錢同リチモンドペル同卅八錢同カメヲ同四十五錢同フラグラント同五十錢同リチモンド八ヲンス九十五錢同紙卷五百本に付ハツトルアツキス三圓十錢同ピンヘツト一圓八十錢同カメラ四圓五十錢同オールドコール一圓八十錢同ハイレート一圓八十錢同ギング三圓十錢船來葉卷マニラ五十本入一圓より三圓同百本二圓より五圓同ハギ二十五本入一圓五十錢より五圓迄

西洋酒　古加葡萄酒大瓶一打入一函に付金四圓香ザン葡萄酒同四圓エビスビール同二圓二十錢キリンビール同二圓卅五錢

西洋食料品　モルトン製菓子丸大瓶一斤入三十五錢同丸小瓶半斤入二十錢同平小瓶二十錢同英國製ビスケット二斤罐入七十五錢同一斤罐入四十五錢

下駄　男及女物にて上等内外中等一圓二三十錢位並物八十錢より一圓位

●とり消し　れこされたるまゝを、かゝぐ。さきにはまことかと聞きて、いたく心をいためつ。この消息を見て、心まづれちゐぬ。

貴社發行の女鑑第百貳拾號雜報欄內に女學生の同盟休校と題し本校寄宿舍生徒貳拾餘名か食物の粗惡なるに堪へ兼ね一同退舍したる旨の記事有之候へと右は全く事實無根に有之候尤も本年九月頃より賄方改革に關し評議する所も有之去十一月より從來の受負賄を癈し生徒をして自炊せしむることに致したる次第にて右等の誤傳に可有之かとも被存候兎に角生徒の退舍したるものとては一人も無之候に付右御了承之上可然御取消相成度此段申入候也

明治二十九年十二月八日

滋賀縣私立高等女學校印

●末松文學博士の講話

婦人の務（つゞき）

女子に至つては其年限が甚だ限りあるのである、夫れでどうも充分に行かないが、併し夫れが故に、殊更學校に居る間から、矢張り家を修むる道といふものに氣を附けて學ばなくてはならない、隨分學校に於ても、夫れ〳〵裁縫とか何とか云ふやうな家持の法を敎へるに相違ないが、夫れは無論のことで、其以上に一つ、前申す樣なる確乎たる主義の敎育と云ふものが無くてはならない事であると思ふ、女子が忠君愛國の心得あることは大切なのである、自分直接のことは兎に角にとしても、子孫の性行を作り、隨て一國の氣風を作るに甚だ肝要である、即ち前に申したる、亞米利加あたりの今の繁盛を來した所以は婦人に在りと云ふ論も、矢張り其確乎たる思想を、女子に段々注ぎ込んで、夫れが自から間接に現はれて來て、國の力を爲すのであると云ふ論旨であります。

而して又、夫れは私が申し升るに付ては、將來婦人と云ふものは、どう云ふ位地を占めるかと云ふ事に付て論じまずると云ふと、隨分婦人は、或は人の妻となり、而して又人の母となる。夫れを一つどうしても眼目に置いて行かなくてはならぬ。人の母となつては自ら母たる所の務がある。古來日本の歷史に段々徵しましても、世の中に名の有るエライ人は、多くは其の母たる人が優れたる人が多いのである。夫れ等の人といふものは、萬世の鑑とならなくてはならぬ。或は楠の母で御座るとか、又は乳母でありますけれ共、春日局で御座るとか云ふ樣な人といふものは、萬世の手本とな

る人である。西洋人の書いた中にも、子供といふものは、一躰どう云ふ原因から來るかは分らない、或は自然の天性より來たるといふ説もあり、或は又、子供の時に母親の所に最も接近して居るからといふこともあるが、どちらから來つても宜しいが、重もに母親に似るといふことが多い。母親の氣質其他を眞似るといふことが多い。故に、子供に對する母親の一躰の擧動其他の事は、餘程肝要であるといふ事が言ふてあります。夫れで私は段々と考へて見ますると、日本に於きましては、殊更この必要があらうと思ふのであります。婦人が自分から、大に功名を成し手柄を爲さうといふ念慮は、やめた方が、廣く言ふと爲に宜しいのでありまして、又夫れを眼目と致しますと、或は夫れから生ずる弊もありませうけれ共、將來の一國の氣風を養ひ成すといふ點、又一國の爲めに立派な人を拵へ出すと云ふ側から論じます時には、婦人の務は最も大なるものである。諸君も御承知の通りに、今日の日本は如何なる日本であるかと言ひますと云ふと、從前とは餘程違つて、一國の責任も、世界に對して餘程強くなつて來て居るのである。或は白晳人種から論じた時には、他の人種は追〱消滅する。追〱減少すると云ふ様なる議論が多かつたのである。既に黒人種抔といふものは、段々〱と數も減り、其國も亡びる有様になつて居る。亞細亞の黄色人種でも、段々獨立を失ふ國が多い、唯だ玆に、之に對しての除外例は何處かと云へば日本である、日本は御承知の通り、維新以來は別して公共心と云ふものが強くなつて來た、合同力といふものが強くなつて來た。夫れ

から國を愛する點から致して、何にも人の物を眞似る丈けでは無い、矢張り國を進歩させなくてはならぬと云ふ點から致して、外國の長所を色々取つて來た。とう〳〵一昨年以來の戰爭になつた所で其結果を現はしたのである、あの長い戰さの間、一艘の船を失つた事なく。一度の戰ひを失つたことと無くして、彼の大國なる支那に打勝つたのである。西洋人が最初之れを見て想像して居つたには、最初の一度や二度は日本が勝つかも知れぬ、併し到底蟷螂の斧で、支那に打勝たうといふこととは無理な話だ、とう〳〵負けるに相違ないと言つて居つた、然るに事實は、夫れとは大に反對の結果を現はして居る。之に付て西洋人は、段々其原因を調べて居るのである、とう云ふ譯で勝つたのであらうか、日本人が戰さの時に鐵砲を擊つことが上手であるといふものか、學問が少しく優れて居ると云ふものか、と云ふ事を研究して見るに、歸着する所は、日本人は忠君愛國の心が貫徹して居つて、勇敢剛壯で、國家の爲に身を捨てるといふ精神があるから其の爲に勝つたのである。此の如くで行つたならば、其の國は益々發達するに相違ないと云ふ樣な議論を段々して居る。其の位に言はれて居るが故に、此氣象を將來に段々養ふて行くことが最も必要である。然るに、一面から申して見ますれば、此の氣象は將來さう云ふ樣になつて行かうが、若し導き樣が惡ければ、或は衰頽しはしながらうかと云ふ虞が無い譯でも無い、其理由はどう云ふ譯かと云へば、元來日本に是まであつたる所の、忠君愛國の氣象の強い、忠孝節義の氣象の強いのは、重もに從來の封建時代に養つ

たのが多かつたのである、其餘習が今日まで殘つて居るので、夫れで維新以來は大きに其の趣が變つて來て、段々と物の模樣が變つて來た。例へば、昔で見れば一騎がけで敵に打込むを勇氣としたのが、今日は一騎がけで命令を聽かないで行つたのは勇氣で無い、命令を奉じないで行くのは却つて行けないと云ふ風になつて來た。畢竟其行動を一緒に出でしめるといふ風になつたのが模樣替の有樣であります。夫れで大きく、人の心を合して、共同の力を事實に現はすと云ふ氣風は、以前よりは大分發達して來たのである。是に從來の忠孝節義の氣が混合して、一緒に雜つて來て居るが故に今日では強いのである、今度模樣替をして新規な模樣に依つて、今までの氣節を無くせない樣に、段段擴げて行く事が最も大切なのである。其任に當りますのには、何がなるかと云へば、將來の學校の敎、並に家庭の敎が最も大切であるだらうと思ひます。又人の妻たる上から論しましても、是亦忠孝節義といふものが、充分に分つた人と分らない人に於ては、餘程趣が違つて來るのである。可笑しな話でありますけれ共、むかし新田義貞が足利尊氏を追討する時に臨んで、數日時機を誤つたのは何の爲であるかと云へば、或は我家が離れ惡かつた爲抔と云ふことは歷史に言ふてある。是が事實かどうか分りませぬけれ共、假りに之を事實と致して見た時には、若しも彼の勾當内侍と言はれた人が、眞に忠孝節義の何たるを知り、こゝはどうも一日も機を忽せにすべからざる所であるといふ事を知つた烈婦であつたならば、或は義貞をして彼が如くに汚名を被らしめることは無かつた

であらうと思ひます。若しさう云ふ樣な事が……是は大きく稀な場合を言ふのでありまするけれ共、之を小にしても同じことである、其事の道理が分つて來た時には、矢張人の妻たる務を爲す上に付ても、社會の爲に益のある事の多いに相違ない。今日私が忠孝節義といふ事を申しまするのも、今文字に現して言ふから一つの空想の樣にありますけれ共、決してさうで無い、此思想を注ぎ込むに於ては、色々な知識が之に伴つて來るのであります。成程古の節婦傳とか、孝子傳とか云ふものを見ますると、一丁字を識らず、即ち假名の一字も知らぬ樣な者でエライ事をする者もあるに相違ない、夫でも節婦の行ひを現はした人もあり、大孝子であつた人もある、併ながら其事柄は宜しいに相違なけれ共、今日以後は唯右の如きことのみではいけない、是は斯る譯ゆゑに、斯う云ふ場合に於ては此の如き事をしなくてはならぬと云ふ譯合を知識上より知つて、古人の爲したる事を多く心に辨へて、之を積んで、其思想の確乎たる一つの固まりになさなければいけませぬ。夫れ故に、此事に付ても、餘程之に附屬した所の歷史的、其他倫理上の知識は矢張り要する事である、其知識を、自分は勿論子孫にまで充分に注ぎ込まなくてはならぬのである、而して此事柄は、必ずしも學校から退いて、人の妻となり、又母となる人のみならず即ち前に申したる所の、師範生徒にしましても、矢張り是から段々と、幼年生徒を敎へて行に付ては、其心持で敎へて行と行ないとは、餘程違ひがあるので、矢張り一般に、一國の婦人の性情を拵へるといふ事を注意して行なくてはならぬと思ます。



敎之庭

十二月廿日兼題　都歳暮

天　廣島市稻荷町　香川　頴子

玄かすかに年の暮とてみやこには
　春のいそきのにきはしきかな

地　三河國寶飯郡下地町　永井さい子

宮人のくつのおとさへなにとなく
　いとまなけなる年のくれかな

人　甲斐國甲府市山田町　名取正代子

何くれと年をむかへんいとなみに
　みやこ大路のにきはしきかな

秀逸　（十五首）

ゆきかよふ人の歩みもいそかしき　諸井　貞子
　みやこれはちのとしのくれ哉

たましきの都のうちもしかすかに　守山比古子
　いそきせらるゝとしの暮かな

人おしもくるまの音もしけきかな　溝口　信子
　みやこ大路のとしのをはりは

こと繁き世とはいへ共ことさらに　高井　孟子
　みやこの暮のいそかしきかな

たてぬきにおやれるはかり都路は　坂田きみ子
　ゆきかひしけき年のくれかな

みや人も荷前のつかひきぬくはり　山田　璋子
　としの終りはひまなかりけり

海山のちゝのみつきをもちいてゝ　久松せい子
　みやこにきはふ年のくれかな

あたらしき年まつ暮のいとなみに　下元もと子
　みやこの市のにきはしきかな

うまくるま物うる聲もいさましき
　みやこ大路のとしのくれかな　吾妻ちか子

こんとしのまうけもをへて宮人は
　ゆたかにくるゝ年をまつらん　瀧　かよ子

一歳をのどかにおくるみやひとも
　くれ行けふはいとなかるらん　藤原　榮子

くれゆかん年を惜めるさまもなく
　みやこ大路のにぎはしきかな　春永己巳子

いへ／＼は春まつ業にいとまなき
　みやこ大路のとしのくれかな　一番ヶ瀬つぎ子

年の暮はやくわるらしみやこへは
　よそにまた見ぬ急ぎをぞする　山本　勝子

暮て行く年のいそぎにみやこぢを
　ゆきかふ人のにぎはしきかな　北川はな子

（以下原稿到着順）

内日さすみやこ大路はにぎはしく
　ゆきかひしげき歳のくれかな　佐々有隣子

賑はしきみやこの空に生ひたてど
　われは老いゆくとしのくれ哉　仁保　基子

常よりもにぎはひましてみゆる哉
　みやこおほちの年のゆふぐれ　甲斐莊優子

行く年のをしきもしらであき人の
　いそしむ聲のさわがしきかな　小野田くに子

ゆく年を惜むこよひもふけはてゝ
　みやこ大路もしづけかりけり　貫井そめ子

都路のかどのともし火たけるまで
　にぎはひにける年のくれかな　宇田川よし子

一とせの限りとおもへはあき人も
　ふくる夜しらで賑はひにけり　小野田かま子

賑はへるみやこ大路のともし火の
　たけるもしらぬとしの暮かな　小野田さく子

人なみに春まつにしもわらなくに
　みやこ大路はにぎはひにけり　小野田ひで子

言の葉のたまもひろはてあき人の
　いそげる年のくれもありけり　安井　章子

人なみの年をゝしめる此のゆふへ
　みやこ大路はにぎはひにけり　岩崎ふく子

あすかゝはなかれてはやき年浪を
　ふねにのりてもいそぐあき人　小玉きん子

けふのみとみやこ大路はあき人の　宇田川うめ子

往き來にぎはふ年のくれかな

いくはくの幸をうるまのあき人は　貫井たま子
年のくるゝもをしまさるらん

都路のちまたをてらすともしひに　小野田きよ子
としのくるゝも忘れはてけり

都にもいとなみしげく成りぬなり　筑紫　杏子
くれゆく年ののこるひと夜は

門松をうるこゑ日々にしけきかな　仁井田富子
みやこ大路のとしのくれかた

朝夕にゆきかひしけくにきはひぬ　筑紫　壯子
さすかみやこの年のくれかな

都にはすゝとりはらひはききよむ　冬木あか子
音にきはしきとしのくれかな

年なみのよするみやこは馬くるま　徳永萬壽子
大路せましとつとふにきはひ

をしと思ふ今年もけふは限りなり　土肥　仙子
みやこの市のつとふ見るにも

長久にきみいませとも暮れて行く　牧山　清子
としはみやこも淀まさるらん

惜しむうむ喜ふわらは行きかひて　櫻井はな子
大路にきはふとしのくれかな

さらぬたに市はせはしき常なるを　星野かず子
ことににきはふ年のくれかな

かざりたてつみたて市は花やかに　星野ひと子
わらひさゝめく年のくれかな

うめやなき床に粧ひてゆとりある　星野康世子
みやこの年のくれそゆかしき

またさらに豐けき年をむかへんと　伯田たか子
みやこの民のこゝろせはしき

内日さす花のみやこのにきはひも　前澤　幸子
いやまさりゆく年のくれかな

くるとても何かをしまむあつさ弓　奥　環子
春のみやこの花とれもへは

いかにせん暮行く年のをしけれと　武田　玉子
みやこの春の花もまたるゝ

としくるゝにしの市人齒かために　畠山千代子
あすもちひよとうる聲そする

ゆくもくも車はさせぬひとそなき　小野田のぶ子
みやこれはちの年のくれかた

常よりもゆききの人のいそかしき　稻田松枝子

みやこ大路のとしのくれか

ひらけゆく都のちまたことえけく　をしむひまなき年のくれかな　小町谷園子

年々にみやこのれはちにきはひて　いそかはしさのまさる暮かな　小町谷里江子

としなみもけふをかきりと都ひと　わかつきかけてたち喚くなり　水津すけ子

みやことて鄙に變らぬくれなれと　人のゆきゝのいそかえくみゆ　滯口直子

うち日さす都れはちのとしのくれ　ゆきゝしけくもなりにける哉　滯口寛子

こゝかしこ物うる聲ろかしましき　みやこれはちの年のくれかた　西村登羅子

行き通ふみやこれはちの賑はひに　いといちえるき年のくれかな　秋園菊子

みや人のゆきかふ袖もいそかるゝ　みやこれはちのとしのくれ哉　日高和子

いつかたもくれゆく年は變らねと　都そことにいとなしけなる　高田さと子

松をうるこゑもきこえて勇ましき　青木春子

みやこ大路のとしのくれかな

こん年をむかふるためと昨日今日　みやこの市はにきはひにけり　犬甘芳子

ゆく年の暮るゝは鄙もかはちねと　みやこ大ちろわきてせはしき　藤林ます子

玉しきのみやこ大ちをゆくひとの　ゆあみせはしき年のくれかな　清水あい子

門松をいとなみたてゝ春またん　みやこれはちのとしのくれ哉　横田秋子

もゝしきの大宮ひともすゝむよに　ことわさしけきとしのくれ哉　服部勝美子

來む年とくるゝ月日はゆきかよふ　みやこの市のにきはしきかな　重松たか子

來む年をまつ設けさへこと〳〵く　鄙にまさるはみやこなりけり　野中あさ子

市人かまうたけうるはゆくとしを　送りむかふる聲にろありける　橋本丹江子

なにしおふ大宮びともいとまなみ　としの暮をはさそいそくらむ　萩原章子

年もはや暮はてにけるしるしとて　植木とよ子

みやこ大路のにぎはしきかな

明くるより暮るゝををしむ年の暮　石川すけ子
いとゞせはしきみやこ人かな

新玉のとしをむかふるいそしさに　佐藤ゆり子
いそぎゆきかふみやこ人かな

かゝみもちあがなひかへる市人の　大谷津琴子
こゝろもいろぐ年のくれかな

年も早や殘りすくなになりぬれど　平野とき子
くれの中にどいそぐいちびと

門松もいとなみ立てゝみやこびと　諸井久良子
こゝろしつけき歳のくれかな

あたらしき春のまうけとみやこ人　舘脇ます子
ゆきゝせはしき歳のくれかな

立ち歸るあしたの春のあらましに　田中冬子
みやこの空もくれにけるかな

いつこにも年の名殘はかはらねど　伊賀隅江子
都はわけてをしまるゝかな

つねにたに都れはちはにきはふを　鈴木誠子
けにたくひなき歳のくれかな

月花のながめもはてゝみやこべは　鷹津とし子
ことわざしげきとしのかれ哉

いとまなき大宮ひとのゆきゝさへ　某
せはしくみゆる年のくれかな

たましきの都はわきてきのふけふ　田巻ひでよ子
ちかつく年のいろきするなり

都ひといとゝせはしく見ゆるかな　大竹治子
今年もゝはや暮れんとすらん

ぬはたまの夜はふけぬれど都大路　福木欽子
ゆきかひしげきとしの暮かな

くれはてゝ春のとなりの近ければ　芦澤萩子
みやこの人のいとまなきかな

人とはぬひなの里にといそぎしを　西堀房子
しらでやけふの年はくれなん

みやこ路に門松ひさくやまかつか　鳥居藤子
足なみはやきとしのくれかな

くれて行くとしをおくりて都びと　西堀光子
わかみの老もわすられにけり

みやこなる大路の往來いやましに　小山勢幾子
いといそがしき年のくれかな

いとひろき都れはぢのせまきまで　新田のり子

にきはひにける年のくれかな

夜もすから都おほ路をゆきゝして　野崎　韋子
ねふるひまなき年のくれかな

ひとしけき都おほ路もきのふけふ　白石　藤子
わきてにきはふ年のくれかな

豐かなる年のをはりのにきはひは　林　久子
みやこ大路にみちあまりけり

花紅葉あかぬみやこも限りありて　廣山とめ子
暮ゆくとしはとまらさりけり

十二月廿日兼題　雪だるま

天　東京市芝區新錢座町十二番地　内田つる子

あなうたて、よべよりふりしきりたる雪を、今ふは朝とくより見はやさむと思ひしに、わらはべにふみあらされて、いと本意なき事よと、うちつぶやきけるに、わらはべおのが前に來りていひけるやう、ゆるし給へ姉君よ、軍ごとして遊ばむとて、かくはしつるになむと詫ぶるさま、いと愛たし、おのれ思ふやう、小兒の勇氣を養ふは、かゝる折こそよかるべけれ、と覺ゆるまゝに、ゆるしやりぬ。さて如何なる事をなすかと見てゐりしに、己がじゝ、あなたこなたとはせまはりて遊ひつゝゐりしが、中に年長けたる一人は、雪だるまを作らむといふに、皆よろこびて作り初めたり、ほどもなく、いと大きなるを二つ作りなしたり。見れば、こはいかに、軍人によそへしものなりけり。そが胸には、何處より持ち來りけむ、木の葉もて、勳章のさま造りそへたるなどいとをかし。さればいとよき事してけりと、これを賞めて、遊びの料にせよと、品々をあたへしに、よろこびて、おの〳〵作りなしたる軍人を大將として遊ぶさま、いとおもしろし。あはれ、此小兒等、後に眞の軍人となりたらむには、如何ばかり勇ましき武夫となりなんと覺えしかば、日々その心して導びきやりぬ。あはれ此雪だるまの大將つくれる小兒等よ、能く學びよく遊びて、後にはまことの大將となりて、御國のために、甚しき功績をあらはせよと、今より待たれてなん。

地　横濱相生町四丁目　三谷起美子

朝まだきねやを出づれば、よべより小やみなく降る

雪に、寒さは肌にとほりて、埋み火のみなつかしけれど、梅はまだほころびずやと、廣からぬ庭に下り立ち、雪ふみわけておされど、垣の外には、をさなげなるちごども寄りつどひて、かしましく笑ふもあり、あなつめたとて、手を口にあつるもあり、何するかと打ちまもれど、いと大きやかなる雪だるまとかいふものを作りて、目鼻口など作りつけ、猶も雪を取り添へてはかためつゝあり、そが中に、いとかしこげなるちごの、此だるまは、吾等いかに手を盡してかたむとも、雪降りやみて朝日照らば、しばしの程にとけはてゝ消ゆべしといへど、皆々さかし〳〵といらふ。あはれちごよ、汝等學びの庭にて、いかにあつき敎へを受くとも、敎への庭を出でなむ後、つゆわが身を顧みる事なくは、雪だるまよりも早くとけなましをと、思はず口走れば、さなり〳〵、早く學びの屋にとて急ぎ去りぬ、けに今の世のちごぞさかしきや、

人　　大坂江戸堀北通三丁目　守山比古子

雪たるまころいとをかしきものなれ。ゆきのいみしうふりたるつとめて、わらはとものあつまりて、いといみしくきよけにつくり立てたるが、朝日のうら〳〵とてりわたるに、ちひさくなりてとけ行くこそをかしけれ、ゆふ暮のほとは、そのかたちもすこく見えたるかさしいてたる月にひかりあひて、めてたく、あいきやうつきたるも、あやしう、三日四日斗へて影たにとゝめすなりぬるこそ、又なくあはれなれ。

(以下原稿到着順)

佐々有鄰子

しはすの十餘日のほどに、雪いとたかうふりたるを、女生等硯のふたにいれつついとれほくれくを、れなじくは遊歩場に、まことのだるまつくらんとて、男生徒もともにあつまりてつくるに、いとたかくつくりなす、今日このだるまつくる人には褒賞すべし、まゐらざらん人にはとゞめんなどいへど、聞きつけたるはまどひまゐるもあり、つくりはてつれど褒賞とらせてなげ出るを、一人づつとりによりて拜みつつみなまかでぬ。これいつまであらりなんと、敎師のたまはするに、十餘日はありなん、ただこのごろのほどをあるかぎり申せどいかにとゝはせたまへど、む月の十餘日までさふらひなんと申すを、師にもゐさはあ

らじとおばすめり、男生などは、すべて年の内までもわらじとのみ申すに、あまりとはくも申してけるかなど、下にはれもへど、かたうわらがひつるに、はたせるかな、雪は圓座むかりになりて、十五日の夕方までのこりてありき。師はさうなり、學友等にも褒められつるもをかしや。

水津すけ子

雪だるまは、名のごとく、雪もてしたる達磨といふ法師のさまなることは、今更いふべきにもあらねど、この法師は、印度の國にうまれいで丶、雲ともまでふ花はれろか、さやけくくまなき月影もなにかは、たゞれのれが鑑とたのむ釋迦といふ人に從ひて敎をまなび、その蘊奥をきはめむと、嵩山といふところに世の塵をさけ、あまたのはる秋をかさねて、遂に吾が志をつらぬきたりとかや。されど後の世に、太師とあがめられ、尊まれ　鑑となりたるこそ、たとしへなくめでたけれ。雪ふりつもるあさまだき、鳥さへねぐらたちかねる冬の空、手の凍ゆるなどはもののかずかは、いと大きやかに、あるは雪をまろめ、あるはたひらにして、のゝしりさわぎて、童子等が作りなすも、げにこの法師の面壁九年の長き月日を、一日だにあだし心もたで、敎へをきはめたりしさまれもひてなりけり。かくいとけなき童子等までも、この法師を知りてたはむる丶にも、この師の形を作りなどするも、師の志を立て丶、挫けしことなくたゆまずいそしみたりしによるものなり。人は齢はつかに五十とかや、いかで勉めはげみて、道をふみ名をあげ身をたてざるべき、さるに月花に心うむはれ、をしむべきとしつきをむなしく過ごすもののみ多かるは、いたましきかぎりならずやは、あはれ世の物に事に當れる人たちよ、この法師の如き心して、學びもし、勉めもえたらむには、名はをろか、千代かけて人の鑑とあふぎ尊まるべくなむ。

高田さと子

二日三日、雪ふりつゞきてありけるが、けさは朝日句ひやかに、てりはえて、野も山も、げに、白かねの眞砂しきつめたらむやうなるに、とぢこもり居たる童ら、うちつれてや出でたりけむ、前の方に、笑ふ聲など賑はしく聞ゆるに、何事をかなし居るならむと思ふ、やがて、弟の走り來て、いざきて見給へ

といふまゝに、立ち出づれは、門のとびらの側に、大なる雪だるまを、つくりなしたるなりけり、畫など見れはねたりけむ、形をかしく、目鼻の位置さへあやしからず、とかう見るほどに、こは福の神ときけむ、お正月にならむよろこびに、手も凍ねたれど、やう〳〵なしとげぬと、いふあれは、足なきもの丶、などめでたかるへきと、いふもあり、中に年長けたるが、先き頃、先生のお話に、これも同じ人なりけり、足のなかりしにあらず、只、佛の敎をひろめむため、心ひろめて、しげき苦しみを忍び、人なき所にて、ながき年月、もの學ばれし樣とかや、たふとき人なりけりと、いとゞおとなしき物語に、いづれもかんじたるさまにて、今より、日々崇めむため、此處へこなむと、いふもありけり、あはれ、幼き遊びのすさびにも、よきものなしたりけるよ、賢き兒らかな、雪のたるまは、日を經なは、消ねてもゆかむ、兒らの心は、いつまでも、今のやうめでたくて、冬の夜夏の日も、忍ぶ心は、この大師にならへかしと、いへは、みなよろこびてうなづけるも、げに、あはれなり。

鈴木昌子

昨日の夕つかたより、雪降り出て丶、空しづかなり、今朝しも、窓の戸をおし開け見しに、空もはれやり、野も山も一面にうづもれはて、木々の梢には、時ならぬ花のひらきし心地して、いとよき眺めなりけり、弟の、二人三たりの朋友かたらひ、庭にて、雪ころがしをなし丶が、やかて一の大きなる雪たるまを作り出でつ、其のすかたいとをかし。そも、君は、手足もなく、全身しろかねにて造りし者の如く、目まだゆく、佳なる所あり、君は耻しめられそしられても、絶ねて意に介せさる如く、いかりも動きもせず、いかにも奥ゆかしく見ゆ。われ常に汝を愛づ、されど日蔭さ丶ぬまの露の命を思へは、あはれといふも中々なり。榮枯盛衰は衆の免れざるを思へど、かへりて、愛て惜まる丶中に、失せはつるこそ、一入増しなれ。

橋本丹江子

きのふ夜すがらふりしきりし雪は、いとめづらしううちつもりしに、あたりのうなゐ子の、またきにいで丶、ゑのころとたはふれあそぶ、こよなうをか

しきや』。いつこのうなゐにかわらむ、おなじきほどの子、二人三たりと、まろきもののせり、やがておのがたけほどになりけるころ、友どちあまた、よひかはして、だるまつくらんといふ、くろくまろきものなどもてきて「やがてつくる』、手やなえけん、おのがしゝわきへに行きて、又いてこんけしきも見えず、何がためにものしけん、うなゐ子がなすわざこそをかしけれ』。あしたはこよなうそらはれわたりて、のきにつもりし雪も、やう〳〵とけかゝりて、ばた〳〵と、しづくしたゝるれとす、やがては、達摩も、かしらのあたりよりきえかゝりて、はては、みながらながれて、いづち行きけん見えず、いとをかしかし』。大そらは、一むらの雲もなう、晴れわたりて、あをそらに、いとたかう富士の御山ぞかゝりたる、こゝにのみこそ雪は、のこりけれ。

失名

更け行くまゝに、吹き荒みし松風も、やう〳〵靜まりて、折ふし、小笹のさら〳〵と音して、戸のひまの怪しうしらむに、いぶかしく。妻戸押しあくれど、思ひかげなく雪の白う積りて、見渡す限り、銀の世界に降りなしたるもいとうれし。霜枯のあはれなる木々の、今日は六の花咲き出で、向ひの岡は、昨日に似もやらず、一色の衣着たらむ抔、いひ出でむ言の葉たになし。かくて降りやみたるなり、我にもあらで。庭に下るゝに、「近きほとりの小童三人四人、雪よ〳〵とさわぐに、見れど、あまた雪をかいとり、いと大きなるものにかためつ、はかなげなる跡なしことも愛でたう、取〳〵のすみもてあるは目、あるは鼻にまかはする抔をかし、はてには、雪たるまとか云ふを作りなし、最もほこりげに、寒にこゞえつゝ語るもをかし、打ち見やる程に、今は朝日のさし出でゝ解け初むるに、あはれや、もの惜げに、またのちの雪にといひつゝ、かへり見勝ちに行きたるさまに、思はずうち笑まれてなむ。

田巻ひでよ子

をやみなく降りつゞきし雪は、いたく積りて、見わたすかぎり、たゞ白妙にうつもれぬ、今日は、日曜なれど童等は、朝まだきより打つどひて、いとたかく雪を積みあげぬ、これなん雪だるまをつくるなりける、やがて大きやかなる雪だるまはなれり、童等

は聲をあげて笑ひさゝめき、いと樂しげなり、冬の日あしの短くて、ほどなくともし火つくる頃になりぬ、童等は、塒をいそぐむら鳥とゝもに、各々家に歸り行きぬ、やゝありて小雨ふり來り、夜にいりても小雨はれやらず、翌朝おき出でゝ見れど、あはれ、童等が寒をしのびてつくりし雪だるまは、あとかたもなし、人のこの世にあるもまたかくのごとし、きのふありとて見し人の、今日はなきかずに入り美しき花も夜半のあらしに散りはつるならひにて榮枯盛衰老少不定、あはれはかなきかぎりにこそ。

福木鉞子

まきの板戸のすきもる光にねざめき、起き出て見れど、いつのまに降りつもりけん、あかつきまでは月も見えしを、野も山もみわたすかぎり、ひたつゞきに白銀を敷きつめたらんやうにて、たゞ池の面のみ綠なしたる。いと〳〵ゆかしきに、打ちわたすむかひの峯は、香爐峯の古言もおもひやられて、學の業にすぐれし人ならんには、やまと歌はたからうたなど、よみいでてつべかんめれど、つたなき身には、何のかひもなく、たゞ恍然として打ちながむるれど、池のかなたの築地のもとに、大きやかなるものゝみゆるに、あないふかしと、緣に下りたちてみれど、ちひさき弟らの、とくおきいでて、さむさもいとはで造れる、雪だるまになんありける、あな姉なる身の、朝いせしおこたりのはづかしさよと、いそぎ朝こと濟まして、又立ち出でみれど、あしなきだるまはいづち行きけん、影だにみえず、いふかしさに、よくよく見渡せど、いましもはなやかにさし出でたる朝日の光に、あともなく消えはてにしぞありける、あはれ。

芦澤萩子

天上に如何なる神のましまして、綿をつみて降らすらん、よべよりつゞきてをやみなければ、遠きはくもりてさらに見わかず、寒さのみいやまして、埋火ならではたよるものもなかりしに、午の刻ばかりより、漸う晴れわたりたりけれど、霜がれはてし庭のおもしろし、木々にはかへり花さきて梢あらせし山風の、うらみも、いつしかきえうせぬ。折こそあれ、徒然にむすばれたりし子供等は、うれしげなるおもゝちにて立ち出でしが、みる〳〵、こなたかなたよ

りより來て、積りし雪を幸と皆々きはひて精出し、かつてやさしの手をふりて立て丶、大きやかなる雪だるまをつくり立てぬ。そが出來ぞへのめでたさよ、形ちはたりたらひておそろしげなるも、しかもこはからず、眼大きやかなるも、定めては何方をもみることなし、あはれ世の畵伯の見たらんには、如何に心をうごかさるらん、これまことと一葉のよしに、はろ〴〵と、身をよせられし、おも影なるか、この、童、すさびにより、永のとし月、世に背き、念念念無念念ちふくすしきことわり見出されけん、その古までもおもひやらる丶まゝに、かくなん書きつくる。

山本勝子

人の命、ありと見るほども、下より消ゆ、と、双が岡の法師の雪佛にたとへけん、げにさるものにてあめれど、そをはかなきものにして、ひたぶるに、世を捨て求めざらん人こそ、いとはいなけれ。かげろふの夕べをまち、夏の蟬の春秋を知らぬもあるを、などか、さ嘆くべき事かは。唯そのはかなきを知らで、懈怠の心を起さず、日に月に、いそしみいそきて、己が目ざす業を成し遂げんぞ、いみじかるべき。古より、事を成し、名を揚げにし人、誰かは、百歲の齡を保ちたりし、所願一事も成就せざるときは、よし千歲を過すとも、一夜の夢の心地こそせめ。されど、まづ人々のいそぎ心得おくべきは、此の事にぞある、其の構をまちて、よく安置してんやなど、ゆめ〳〵、いふべき事にあらずかし。たま〳〵、雪達摩の物語せしとき、論ひし一ふしを、

あだなりと見てやはやまぬ朝顏の
咲くも萎むも花の誠を

といへる、古き歌の心も、思ひ出でられて、かくなん。

林久子

朝まだき、とり〳〵いひさわげるは、我まつ雪の降けるにやあらむと、つねよりもはやう起いで、ねやの戶ひきあくれど、いつのほどに、ふりつもりけむ、よもの野山は、白妙にさながら白銀をしけるが如し、きのふまで、さびしかりつる木々の梢は、時ならぬ花さき、いぶせき草のいほりさへ、玉の宮居とあやしまる丶斗りなりけり、面白のながめやと、ひとりごつ折から、門のかたにあまたのうなゐらの、の丶

しり合ふは、何事にやあらむと、出て見れば、ゆきゝの人のたよりよからむ事をはかりてや、ふり埋めたりし雪を、おしまろめて、達磨てふ佛の像を作りたるは、うなゐらのわざと見るも、いとをかし、また此の佛の人々を法のをしへに導かんとて、みづから座禪の業を終たりけん見ぬよのことさへしのばれて、なん、

廣田とめ子

よひよりの雪は、白妙にふりつもり、野も山も、白銀をしきたらんやうなり、今朝は庭の雀のあさるけしきもなく、往來はげしき大路、車の音だに聞えず、たゞ折〳〵うなゐらが、雪をよろこぶ聲の聞ゆるのみにて、いとゞしづけかりけり、かくめづらかなる、景色をひとり見はべらんも、あたらしと思ひて、友かり行かんものをと、出立ける程に、道の邊に大きやかなる雪佛を作りたるは、頑是なきうなゐらが手すさびなるにや、うれしき景色も、たへがたき寒さをも知らず顔なるは、あなをかしきたくみなるかなと、いくたびもかへり見つゝ行すぎつ。

あさ日にはきゆるならひの雪佛
あるをありとはいかでたのまん

兼題

明治卅年一月廿日
歌……若水
文……筆

同年二月五日
歌……山家初春
文……雪を見て

●家政

女鑑第百貳拾貳號目錄

(明治二十四年六月八日内務省許可)
(明治廿五年三月十二日遞信省認可)

社告

○代價は通貨又は郵便爲替小爲替銀行爲替及通運にて本社へ御直送之事○郵便爲替は東京銀座郵便取扱所へ御振込可被下事○郵劵を以て代金に換用せらるゝ時は一割增の事○別に領收證を出さず金員領收の上は直に女鑑を發送すべし若强ひて領收證を要せらるゝ方は別に證書郵送料御送附の事○未納税の來書は一切受取不申候事

女鑑

每月五日廿日發行

定		價	廣告料
一冊	六冊(三ヶ月分)	十二冊(半年分)	五號活字廿三字詰一行金二十錢
十錢	五十五錢	壹圓	
全國無遞送料			

明治二十九年十二月十九日印刷
同　年十二月二十日發行

東京京橋區築地二丁目二十一番地
發行兼印刷人　川崎直衞
同
編輯人　山根勇藏
同
發行所　(電話番號本局八八)　國光社

(印刷所　東京國光社印刷部)